

ハワイ大学 NICE プログラム効果分析報告書

網谷 祐一・早瀬 篤



ハワイ大学 NICE プログラム効果分析報告書

網谷祐一・早瀬 篤

目次

序論	p. 1
第一章 TOEFL の結果との関連に見る NICE プログラムの成果	p. 4
第二章 NICE プログラム・アンケート分析	p. 14
第三章 結論	p. 33
付録1 アンケート原本	p. 39
付録2 アンケート結果の集計	p. 46

序論

本報告書は、京都大学の世界展開力教育プログラム「『開かれた ASEAN + 6』による日本再発見—SEND を核とした国際連携人材育成」の一環として行われた米国ハワイ大学マノア校の「NICE プログラム」への学生派遣事業の成果について報告する。この教育プログラムは、グローバル化と混迷の時代に、日本を外から見つめ直し「再発見」することによってアジアおよび世界に貢献する人材を育成することを目的とする。この目的に資するために、この派遣事業では京都大学の学部生・大学院生を米国ハワイ大学マノア校の NICE (New Intensive Courses in English) プログラムと呼ばれる英語研修コースに派遣し、約 3 週間にわたって英語でのコミュニケーション能力の向上とハワイの文化理解を目的とするコースを受講させた。本教育プログラムの参加者は、一人の例外を除いて、二人一組になって同じ家にホーム

日時	2013年2月3日～24日
参加人数	23人 (京都大学の学部生・大学院生)
募集方法	45人の応募者の中から理由書と語学試験の成績をもとに選抜
授業受講時間	3時間50分/日 (12:30-16:20) × 15日間。計約57.5時間。 (他にカルチャーワークショップやハワイ大学による特別講義あり)

参加者の構成		
性別	男性	9人
	女性	14人
学部 (大学院含む)	法学部	2人
	経済学部・経済学研究科	6人
	文学部・文学研究科	10人
	農学部	4人
	人間環境学研究科	1人
学年	学部生	19人
	(一回生5人、二回生9人、三回生4人、四回生1人)	
	大学院生	4人
	(修士課程3人、博士後期課程1人)	

表1. NICEプログラム派遣事業の概要

ステイし、現地の生活を間近に体験した。また今回の派遣事業特有のイベントとして、参加者だけのためにハワイ大学の教授による特別講演も開講した（本事業の概要については表 1 を参照）。

さらにこの事業では、コース受講がどの程度英語力の向上に寄与したかを測定するために、参加者にプログラムの参加後に TOEFL テスト（Test of English as a Foreign Language, 主に北米の大学・大学院に出願する際に英語運用能力測定のために受験が義務づけられるテスト）を受けさせた。また参加の条件として TOEFL あるいは IELTS（英国などに留学する際に必要となるテスト）のスコア証明書の提出を求め、これによって参加前後でのスコアの比較を可能にした。さらに帰国直後の参加者にアンケート調査をおこない、事前の学習体験から事業全般、今後検討すべき課題についてまで率直に意見を聞いた。

本報告書では、これを受けて本派遣事業の効果及び将来への課題を報告する。具体的には参加者の TOEFL スコアを分析し、このプログラムがどのような点で英語運用能力向上に寄与したのか（しなかったのか）考えると共に、参加者のアンケートの回答を読み解くことで、彼らがどのような点で事業に満足しているのか・していないのかを明らかにし、将来改善すべき箇所をはっきりさせることを目的とする。

報告書の全体の構成は以下の通りである。第一章では、プログラム参加者の出発前後の TOEFL スコアを比較分析する。結果として、このプログラムが参加者の英語力向上に効果があったことが強く示唆されること、また特にスピーキング及びライティングに効果があったことが判明した。さらに最後ではなぜ本プログラムが（もともと参加者がその技能に自信を持っていた）ライティングに特に効果があったのか、簡単な分析を行う。第二章では報告会におけるアンケート調査の結果を報告する。これによって参加者の事前の英語力のレベル、プログラムの授業やホームステイ体験についての感想などが明らかになる。第三章ではこれらの分析をもとに、今後同種のプログラムを開催する際に改善すべき点を指摘したい。附録ではアンケートの原本及び結果のデータを提供する。

最後に、我々（網谷・早瀬）が本報告書に携わった経緯について簡単に説明する。網谷・早瀬はこの派遣事業が行われた 2012 年度に京都大学大学院文学研究科の「外国語支援プロジェクト」の英語担当研究員だった（その後網谷は 2013 年 4 月に東京農業大学に異動）。このプロジェクトは人文学研究を志す学生の外国語力向上を目標としており、世界展開力教育プログラムと密接な関係を持っていた。そのため両方のプロジェクトに関わる本学の海田大輔・留学生担当講師より、我々が本報告書の作成を依頼された。網谷・早瀬とも実際の派遣には同行していないが、参加者の TOEFL スコアおよびアンケート結果を提供され、それに基づき分析を行った。実際

の執筆では、序論・第二章（一部）・第三章について網谷が、第一章・第二章（一部）について早瀬がドラフトを作成し、その後双方のコメントに基づき改稿した。

網谷祐一・早瀬 篤

第一章

TOEFL の結果との関連に見る NICE プログラムの成果

1. はじめに

本章では、2012 年度の世界展開力プログラムの一環としてハワイ大学 NICE プログラムに参加した学生について、このプログラムの成果を、参加者が出発直前と帰国直後に受けた二回の TOEFL のテスト結果との関連で分析するものである。まず、§2 において今回の分析の諸条件について断った上で、§3. で二回の TOEFL の結果とそれについての基礎的な分析を見ることにしたい。この分析では NICE プログラムが全体として重要な成果を収めたことが判明する。またこの他に、参加者のライティング能力の向上が顕著に見られることが判明するが、NICE プログラムはオーラル・コミュニケーションに重点を置いているので、なぜライティング能力の向上が見られたのか、一見したところでは説明が難しいと思われる。§4 ではこの事実について若干の考察を試みたい。最後に、§5 で簡単に分析の結果をまとめることにしたい。

2. 分析の諸条件について

最初に、今回の分析のために有効なサンプル数が 18 であることについて注記しておきたい。今回のハワイ大学 NICE プログラムに参加した学生は全体で 23 人である。しかし、このうち出発前と帰国後の二回 TOEFL を受験し、点数の詳細が判明しているのは 18 人のみである。残りの参加者のうち 3 人は出発前に IELTS を、帰国後に TOEFL を受験しており、両者の試験結果の直接的な比較はできない。また別の 2 人は出発前の語学証明スコアが自己申告となっており、点数の詳細が不明である。したがって、これら 5 人を除く 18 人が、今回の分析のために有効なサンプル数となる。

この 18 人というサンプル数はやや少ないように見えるかもしれないが、後に見るように、t 検定と呼ばれる方法で統計的に分析したところ、主要な結果については 5 パーセントあるいは 1 パーセント有意水準で統計的に有意になることがわかる。つまり、今回のサンプルが母集団からランダムに選ばれたものだと仮定したときに、ここで見るような差が偶然によって生じる可能性は 5 パーセントあるいは 1 パーセント以下である。したがって、サンプル数は以下の考察の大きな障害とはなっていないことを注意されたい。

3. 試験結果とその概観

それでは、試験結果を二つの表(表1と表2)に示すことにしたい。表1は、NICEプログラム参加のためにハワイに出発する直前と帰国後に受験したTOEFLの全体スコアの比較表であり、表2はリーディング、リスニング、ライティング、スピーキングという四つの技能ごとのスコアの比較表である。帰国後に受験した点数から、出発前に受験した点数を引いた結果を、試験結果の差とする。TOEFL全体の点数に関して、二回の試験結果の差が大きいものから参加者を順に並べることにし、この順序でA, B, C, ...の記号を割り当てた。最下段には、出発直前のスコア、帰国後のスコア、ふたつの試験結果の差、それぞれの平均値を記載している。

この結果から次のようなことが言える。

(1) 全体スコアに関して

(a) NICEプログラムはTOEFL全体スコアの上昇に貢献している。今回扱われたケースでは、参加者全員を平均して12.3ポイントの上昇が見られる。出発前と帰国後で平均値の差に関するt検定を行ったところ、両者の差は1%有意水準で有意であった($t=-4.97$, $df=17$, $p<0.01$)。つまり、偶然によってこのような差が現れる可能性は1パーセント以下である。ここからNICEプログラムはTOEFLのスコアに重要な貢献をしたと判断できる。

もちろんこうした点数上昇には、複数回同じ試験を受けて問題形式などに慣れること、すなわち「試験慣れ」が貢献した可能性も考えられる。しかし今回の試験結果の向上は、この試験慣れの現象だけでは説明できない面があることは確かであろう。一般的に言って、一回目のテスト受験時と比較して、二回目のテスト受験時に試験慣れの効果による得点の飛躍的な上昇が見られるのは、これまで類似の英語の試験を受験したことがない場合、あるいは最後に

参加者	合計得点		
	出発前	帰国後	差
A	45	83	38
B	45	72	27
C	40	61	21
D	54	73	19
E	71	86	15
F	56	70	14
G	56	69	13
H	65	77	12
I	43	54	11
J	58	68	10
K	60	70	10
L	61	69	8
M	90	97	7
N	78	85	7
O	68	74	6
P	54	58	4
Q	69	73	4
R	81	76	-5
平均値*	60.8	73.1	12.3

*平均値は小数点第2位を四捨五入

表1. TOEFL全体スコア比較表

参加者	合計得点		
	出発前	帰国後	差
M	90	97	7
R	81	76	-5
N	78	85	7
E	71	86	15
Q	69	73	4
O	68	74	6
H	65	77	12
L	61	69	8
K	60	70	10
J	58	68	10
F	56	70	14
G	56	69	13
D	54	73	19
P	54	58	4
A	45	83	38
B	45	72	27
I	43	54	11
C	40	61	21
平均値*	60.8	73.1	12.3

*平均値は小数点第2位を四捨五入

表1*. TOEFL全体スコア比較表
(出発前スコア順)

受験してからかなりの時間が経過している場合である。このとき、一回目のテストで、英語能力の不足によってではなく、テスト形式についての無知によって、実力よりもかなり低い点数が出てしまい、二回目のテストでは、テスト形式を知ったことによって、実力通りの点数が出ることもある。これに対して、実施されたアンケート調査によると、今回の参加者の大半が比較的最近に TOEIC, TOEFL, IELTS を受験していることが分かる (アンケート §1. 質問 6)。もちろんアンケートは無記名なので、これまで英語の試験を受験したことがない学生が、点数が飛躍的に上昇しているサンプル (例えば出発前受験時に 45 点、帰国後受験時に 83 点) と一致する可能性は否定できない。しかし、飛躍的に上昇している三つのサンプル (参加者 A, B, C) を除外して統計を取り直しても、試験全体および個別スキルごとの結果の向上傾向に変化は見られないばかりか、全体スコアの平均差の統計的有意性の度合いはむしろ高まる (t 検定: $t=-5.62$, $df=14$, $p<0.01$)。したがって、今回の試験結果の向上は「試験慣れ」のみによっては説明できないのであり、この意味でプログラムの成果によるところが大きいと主張することができるだろう。

(b) 出発前の TOEFL のスコアが低い参加者のほうが NICE プログラムの貢献度は高い。表 1 に与えられたデータを出発前の TOEFL スコアの高い順に並び替えて、これを表 1* とし、この上位層と下位層とを比較してみることにしたい。それぞれ 9 人ずつからなる出発前のスコアが 60 点以上のグループ (サンプル M-K) と 60 点未満のグループ (J-C) に全体を二分割する。60 点以上のグループの出発前平均得点、帰国後平均得点はそれぞれ 71.4 点、78.6 点であり、その差は 7.2 点である。これに対して、60 点未満のグループの出発前平均得点、帰国後平均得点はそれぞれ 50.1 点、67.6 点であり、その差は 17.5 点である。帰国後のテスト結果では両者の差はかなり縮まっていることが分かる。したがって、NICE プログラムの貢献度は TOEFL の点数がもともと 70 点前後の参加者よりも、50 点前後の参加者に対してのほうがずっと高いとすることができる。もちろん、もともと TOEFL で高得点を獲得した学生がさらに点数を伸ばすよりも、低得点に留まっていた学生が点数を伸ばす方が容易なので、そのかぎりでの結果は当然のことかもしれない。しかし、このことはプログラムの適切な対象について重要な情報を提供すると言えるだろう。つまり、もしプログラム参加者を選別するに当たって、プログラム参加前の TOEFL の点数を参考資料として利用し、なおかつ帰国後の TOEFL の点数の上昇幅をプログラムの成果であると考えるのであれば、この結果は、TOEFL で低得点に留まっている学生をプログラムの主要な対象として選ぶべきことを示していると言えるだろう。

参加者	リーディングの結果			リスニングの結果			ライティングの結果			スピーキングの結果		
	出発前	帰国後	差	出発前	帰国後	差	出発前	帰国後	差	出発前	帰国後	差
A	24	25	1	22	14	-8	20	20	0	15	17	2
B	11	16	5	15	9	-6	15	18	3	13	15	2
C	21	19	-2	14	14	0	20	22	2	14	18	4
D	27	29	2	22	25	3	22	24	2	19	19	0
E	17	22	5	3	9	6	10	15	5	10	15	5
F	25	23	-2	17	22	5	18	24	6	11	17	6
G	7	16	9	12	19	7	18	20	2	8	17	9
H	20	21	1	16	15	-1	12	15	3	8	19	11
I	19	16	-3	3	10	7	10	14	4	11	14	3
J	11	16	5	15	14	-1	18	24	6	14	14	0
K	16	20	4	4	20	16	14	21	7	11	22	11
L	22	19	-3	14	14	0	17	21	4	3	15	12
M	23	20	-3	14	17	3	12	20	8	11	13	2
N	15	23	8	21	16	-5	15	20	5	17	15	-2
O	19	23	4	17	17	0	14	20	6	15	17	2
P	23	27	4	20	17	-3	17	21	4	18	20	2
Q	17	21	4	9	15	6	15	20	5	13	17	4
R	20	19	-1	15	15	0	15	21	6	11	14	3
平均値*	18.7	20.8	2.1	14.1	15.7	1.6	15.7	20	4.3	12.3	16.6	4.2

*平均値は小数点第2位を四捨五入

表2. TOEFLスキル別スコア比較表

(2) スキル別スコアに関して

(a) スキル別に見ると、ライティングとスピーキングのスコアの上昇が大きいのに対し、リーディングとリスニングのスコア上昇は小さい。ライティングとスピーキングについては、二回の試験結果の差がそれぞれ 4.3 点、4.2 点であるが、リーディングとリスニングについては、その差がそれぞれ 2.1 点、1.6 点に留まっている。この違いは統計的にも示すことができる。各スキル別に出発前と帰国後で平均値の差に関する t 検定を行ったところ、ライティングとスピーキングについてはともに 1% 有意水準で有意差が認められた (ライティング : $t=-8.93$, $df=17$, $p<0.01$ 、スピーキング : $t=-4.4$, $df=17$, $p<0.01$)。これに対しリーディングとリスニングでは 1% 有意水準では有意差が認められなかった (ただしリーディングは 5% 有意水準では有意、リスニングは 5% 有意水準でも有意ではなかった ; リーディング : $t=-2.35$, $df=17$, $p<0.05$ 、リスニング : $t=-1.19$, $df=17$, $p>0.05$)。ここから言えることは、NICE プログラムの貢献度は、ライティングとスピーキングに顕著に見られるということである。この結果は、プログラムがリスニングとスピーキングの改善に役立ったと考える参加者の意識傾向と乖離しているので、特にライティングにおける現状と参加者の意識との乖離について次のセクションで改めてその理由を考察してみることにしたい。

(b) 全体スコアが大きく上昇した半数の参加者は、残りの参加者と比較して、リスニングとスピーキングの点数が大きく改善している。まず表 1 について、全体スコアの試験結果の差が 11 ポイント以上あるグループ (サンプル A-I ; 以下「大幅上昇グループ」とする) と 11 ポイント未満のグループ (サンプル J-R ; 以下「小幅上昇グループ」とする) の二つにサンプルを分類する。そしてこの 9 人ずつからなる二つのグループのスキル別のスコアを比較してみることにしよう (表 3 を参照)。ここから次

のことが判明する。まずリーディングとライティングについては、どちらのグループのスコアの改善状況もほとんど変わらない。つまり、大幅上昇グループと小幅上昇グループは、リーディングについてそれぞれ 2.1 点と 2.2 点、ライティングについてそれぞれ 4.7 点、4 点の改善が見られる。この結果に有意な差はほとんど見出せない(実際、統計的に有意な差ではない)。それに対して、リスニングとスピーキングについては、大幅上昇グループが小幅上昇グループよりも大幅に改善している。つまり、リスニングについては、大幅上昇グループは 5.1 点の改善が見られるのに対し、小幅上昇グループは逆に 1.9 点スコアを落としている。スピーキングについては、大幅上昇グループは 7 点の改善が見られるのに対し、小幅上昇グループは 1.4 点しか改善が見られない。したがって、NICE プログラムによって全体スコアを大きく改善した参加者は、とくにリスニングとスピーキングの技能で点数の大幅な上昇があることが分かる。逆に、NICE プログラムによってあまり点数を伸ばせなかった参加者は、これらの技能で点数を伸ばせていないか、あるいは逆に点数を落としている可能性がある。

	リーディングの結果			リスニングの結果		
	出発前	帰国後	差	出発前	帰国後	差
大幅上昇グループ平均得点	18	20.1	2.1	10.6	15.7	5.1
小幅上昇グループ平均得点	19.4	21.6	2.2	17.6	15.7	-1.9

	ライティングの結果			スピーキングの結果		
	出発前	帰国後	差	出発前	帰国後	差
大幅上昇グループ平均得点	14.2	18.9	4.7	10	17	7
小幅上昇グループ平均得点	17.1	21.1	4	14.7	16.1	1.4

表3. 全体スコア差で分けた二つのグループのスキル別スコア

4. 試験結果についての若干の考察

試験結果の基本的な概観で言及したように、NICE プログラムの貢献度はとくにライティングとスピーキングという二つの技能に関してはっきりと見て取ることができた。このうちスピーキングの技能向上については、NICE プログラムがオーラル・コミュニケーションに重点を置くことから容易に理解できる。しかし、ライティングについては、NICE プログラムはそれほどこの技能に重点をおいていないだけでなく、アンケートでも、このプログラムが TOEFL の勉強に役立ったと回答した参加者のなかで、プログラムをライティングの向上に結びつけた人は誰もいない(アンケー

ト§4. 質問 5 (1))。そこで、NICE プログラムの成果が、どうしてライティングについてとくに見られるのかを考察する必要がある。このセクションでは、まず仮説を提示して、それを吟味することによって考察するという手続きをとりたい。

最初に、検討してみたいのは次のような仮説である。

仮説 1) これまでほとんど訓練されていなかったスキルがとくに改善された。

短期間で技能に改善が見られるのは、(S1) それまであまり経験や訓練を積んでいなかった事柄についてであるか、あるいは (S2) その事柄について経験や訓練を積んでいたけれども、効果的な手法を用いていなかったかのいずれかである場合が多い。だから今回の結果もそのような事例の一つであると考えるのが自然である。そこで、最初の仮説は、(S1) の可能性を考慮して、普段訓練されていなかったスキルについて試験結果の改善がとくに見られるのだと想定する。

しかし、ライティングについて参加者がこれまで訓練されていなかったというのは事実と反する。このことは、リーディングとライティングを重視する日本の中学校・高校の英語教育や京都大学の入試問題の出題傾向を考えるだけでも明らかであるが、それだけでなく今回の調査対象となるデータからも裏づけることができる。第一に、出発前の技能別スコアを見ると、参加者全体のライティングの平均点数は 15.7 点であり、これはリーディングの 18.7 点に次ぐ二番目であり、あまり改善の見られなかったリスニングの 14.1 点よりも高い (ただしライティングとリスニングの差は統計的に有意ではない : $t=-1.49$, $df=18$, $p>0.05$)。第二に、実施されたアンケートでは、一番目に得意な技能と二番目に得意な技能として、それぞれリーディングとライティングを選んだ参加者が、他の技能を選んだ参加者よりもずっと多い (アンケート §1. 質問 1)。

そこで二番目に検討してみたいのは、次のような仮説である。

仮説 2) これまでと違った仕方であウトプット的能力全般が改善された。

この仮説は、仮説 1 と違って、ライティングについては (S2) の可能性を考慮する。つまり、参加者がライティングに訓練を積んでいなかったと想定するのではなく、参加者が今回のプログラムで TOEFL のライティングテストに効果的な仕方であ訓練を積んだと想定する。スピーキングについては仮説 1 と同様に、それまでにあまり訓練を積んでいなかったために大幅な向上が見られたと想定する。

この仮説の主要な根拠となるのは、NICE プログラムの内容が、参加者が学習してきた英作文よりも TOEFL のライティング問題に親和性を持つという事実である。京都大学の入試問題における英作文問題に見られるような、高校の英語学習における英作文問題と TOEFL のライティング問題とでは、どちらも英語ライティングの技能を計るものだが、その試験の性格は大きく異なっている (問題の具体例は本章末尾の参考資料を参照されたい)。つまり、京都大学の入試問題では「与えられた文章を英語に直せるかどうか」を計るのに対して、TOEFL では「エッセイ形式の論理的な文章が書けるかどうか」を計ると言える。実際、試験問題を解くプロセスを考えると、京都大学の入試問題を解くときには、まず (1) 与えられた日本語の文を理解したうえで (必要ならばこの段階で英語に直しやすいようにパラフレーズする)、(2) それを英語に置き換えるというプロセスを辿る。それに対して、TOEFL では、まず (1') 自分の考えをまとめた上で、(2') それを英語に置き換えるというプロセスを辿るのである。ところで、今回の NICE プログラムでは、ディスカッションやプレゼンテーションなどを通じてオーラル・コミュニケーション (とくにスピーキング) の訓練を行ったのであるが、この NICE プログラムの訓練も、TOEFL のライティング問題を解くときと同様に、まず (1') 自分の考えをまとめた上で、(2') それを英語に置き換えるというプロセスを辿るのである。もちろん、TOEFL のライティング問題を解くときには書かれた英文が問題になるのに対して、NICE プログラムにおけるディスカッションやプレゼンテーションでは話される英文に重点が置かれるという違いはある。しかし、(1') と (2') のプロセスの訓練を行ったという事実は重要である。高校の英語学習においては、この (1') と (2') のプロセスの訓練をあまり行っていないので、NICE プログラムの訓練の結果として、このプロセスを共有するスピーキングの点数とライティングの点数がともに上昇したと考えるのは理に適っている。

このことはまた、参加者が日常的に「自分の考えをまとめて、英語に置き換える」という訓練をしていないことから裏づけられる。高校までの英語教育では、文法的に間違いのない、完成度の高い英文を書くことに重点を置き、自分の考えをまとめて書くという訓練はあまり行われない。またアンケートでは、日常的な英語学習を調査しているが (アンケート §1. 質問 3-5)、日常的に英語を学習している場合でも、「自分の考えをまとめて、英語に置き換える」という訓練をしている参加者は独習内容に「英語で日記を書くこと」を挙げた一人に留まっている。したがって、NICE プログラムによる訓練によって、多くの参加者が TOEFL のライティングの点数を向上させたのではないかと推測できる。

京都大学の入試問題によって計られるライティング能力と TOEFL によって計られるライティング能力にはもちろん共通する部分がある。このことが、もともと

TOEFL のライティングの点数が比較的高いことに繋がっていると思われる。しかし、参加者がライティングを得意な技能に挙げるとき、おそらくこの二つのライティング能力を区別してはいない。したがって、参加者は自分たちが過去に十分にライティングを訓練してきたと考え、NICE プログラムによってアウトプット能力が向上したときでも、その能力の向上を十分に意識しなかったのではないかと考えられる。

5. まとめ

以上の TOEFL の結果との関連に見る NICE プログラムの成果の分析をまとめることにしたい。まず、二回の TOEFL 受験の結果から次のようなことを言うことができた。

- (1) (a) NICE プログラムは TOEFL 全体スコアの上昇に貢献している。
(b) 出発前の TOEFL の全体スコアが低い参加者のほうが、NICE プログラムの貢献度は高い。
- (2) (a) スキル別に見ると、ライティングとスピーキングのスコアの上昇が大きいのに対し、リーディングとリスニングのスコア上昇は小さい。
(b) 全体スコアが大きく上昇した半数の参加者は、残りの参加者と比較して、リスニングとスピーキングの点数が大きく改善している。

NICE プログラムの成果は平均してスピーキングとライティングの上昇に見られる。これは、§1.3 の仮説 2 で提案したように、おそらく「自分の考えをまとめて英語で書く」というアウトプット能力が訓練されるためであると思われる。また、アンケートでは、今回のプログラムによってリスニングのスキルが「向上した」と考える参加者が 3 人おり、他のスキルについては、スピーキングについて「練習できた」という意見はあるものの、「向上した」という意見はなかった (アンケート §4. 質問 5)。しかし、この意識とは裏腹に、参加者全体を平均すると、リスニングスキルの向上はあまり見られない。リスニングスキルの向上には、NICE プログラムで行われるような短期間の集中的な訓練ではなく、もっと日常的な訓練が必要であるかもしれない。

〔参考資料：TOEFL iBTのライティング問題と京都大学入試問題の和文英訳問題との比較〕

(1) TOEFL iBTのライティング問題の例 (Sharpe, P. J. *Barron's TOEFL iBT*, 13th edition, Hauppauge, New York, 2010, pp.224-225)

第一問 (20分) : *Integrated Essay "School Organization"*

You have 20 minutes to plan, write, and revise your response to a reading passage and a lecture on the same topic. First, read the passage and take notes. Then, listen to the lecture and take notes. Finally, write your response to the writing question. Typically, a good response will require that you write 150-225 words.

Reading Passage

Time: 3 minutes

Historically, schools in the US have borrowed the European system of school organization, a system that separates students into grades by chronological age. In general, children begin formal schooling at the age of six in what is referred to as the first grade. For the most part, students progress through twelve grades; however, some students who do not meet minimum requirements for a particular grade may be asked to repeat the year.

Graded schools are divided into primary grades, intermediate grades, and secondary grades. Primary education includes grades 1 through 5 or 6, and may also provide kindergarten as a preparation for first grade. Referred to as elementary school, these grades are usually taught by one teacher in a self-contained classroom. Intermediate grades begin with grade 6 or 7 and offer three years of instruction. At this level, teams of teachers may collaborate to provide subject-based classes similar to those offered in high school. Viewed as a preparation for high school, intermediate education is known as junior high school. At grade 9 or 10, secondary school begins. Classes taught by subject specialists usually last about fifty minutes to allow a student ten minutes to move to the next class before it begins at the top of the hour. At the end of twelve successful grades of instruction, students are eligible for a secondary school diploma, more commonly called a high school diploma.

〔Lectureは部分は省略する〕

Question

Summarize the main points in the lecture, explaining how they cast doubt on the ideas in the reading passage.

第二問 (30分) : *Independent Essay "An Important Leader"*

Question

Leaders like John F. Kennedy and Martin Luther King have made important contributions to the people of the United States. Name another world leader you think is important. Give specific reasons for your choice.

(2) 京都大学入試問題の和文英訳の例 (2013 年京都大学入試問題から)

III 次の文章(1), (2)を英訳しなさい。(50 点)

- (1) 今日、睡眠不足は見過ごせない問題となっている。原因の一つは、社会全体が深夜も多くの人起きていることを想定して動いていることである。照明器具の発達も、我々の体内時計を狂わせているのかもしれない。その一方で、多くの学校や会社の始まる時間は変わっていない。こうして睡眠不足が生まれやすくなり、日中の集中力の低下を引き起こすのだ。
- (2) 南半球を旅行していた時に、見慣れない星々が奇妙な形を夜空に描いているのを目にした。こうした星座のなかには、航海に必要な器具や熱帯に住む動物の名前が付けられたものがある。星座の名前の由来について、私には正確な知識がないが、何百年か前の船乗りたちが何を大切に、何に驚いていたのか、その一端がうかがわれる。

第二章 NICE プログラム・アンケート分析

本章では、2012 年度の世界展開力プログラムの一環としてハワイ大学の NICE プログラムに参加した学生に対して、帰国直後に実施したアンケートの結果をまとめたものである。アンケートのセクション分割に応じて、全体は次の四つのセクションから構成される。

1. 参加前の英語力および学習方法・英語を学習する目的について
2. NICE プログラムの授業
3. ホームステイについて
4. 派遣プログラム全体の評価

アンケート実施日	2013 年 3 月 15 日
回答形式	記号選択式および自由記述式
回答者数	16人（参加者全体数 23人のうち）
回答者の性別	男 6人、女 9人（1人未記入）
回答者の学年	学部生 14人、大学院生 2人
プレイスメントテストの結果	Basic 0人、High Basic 0人、Intermediate 3人、 High Intermediate 6人、Advanced 5人、 そのほか (High IntermediateとAdvancedのミックス) 2人

表1. NICEプログラム・アンケートの概要 (一部質問0より作成)

1. 参加前の英語力および学習方法・英語を学習する目的について

アンケートの最初のセクションでは参加前の英語能力や英語学習についての調査を行った。(1) 質問 1, 2 では、リーディング・ライティング・リスニング・スピーキングという四つの技能のうち、現在得意である技能と将来伸ばしたい技能について聞いた。次に、NICE プログラム参加者の過去の英語学習歴を調査するために、(2) 質問 3-5 では普段の英語学習について、(3) 質問 6, 7 では過去の英語試験の受験経験について、(4) 質問 8, 9 では過去の留学経験について、それぞれ質問した。(5) 質問 10 は英語を学ぶ目的についての調査である。

1.1. 四つの技能のうち現在得意である技能・将来伸ばしたい技能

(質問 1) 最初に、現在の英語力についてお尋ねします。リーディング・ライティング・リスニング・スピーキングのうち、一番得意な技能と二番目に得意な技能をお答えください。

最初に、リーディング・ライティング・リスニング・スピーキングの四つの技能のうち、一番得意な技能と二番目に得意な技能がどれであるのかを質問した。これに対して、10 人の学生が一番得意な技能としてリーディング、二番目に得意な技能としてライティングを挙げている。また 5 人の学生がリーディングとリスニングの一方を一番目に得意な技能として、他方を二番目に得意な技能として挙げている（一番目にリーディングを挙げた学生が 3 人、リスニングを挙げた学生が 2 人）。この他にひとり、一番目にライティング、二番目にスピーキングを得意な技能として挙げた学生がいる。

全体的に見ると、最も多くの参加者が得意なスキルとして挙げるものはリーディングであり、それにライティングが続く。例外的にスピーキングを得意な技能として挙げた学生は、海外インターンシップで来日した学生のサポートをすることによって、習慣的に英語を話す機会を持つ学生である (§1. 質問 4)。日本の中学・高校の英語教育はリーディングとライティングに重点を置いているので、大学の学部生以上である今回の参加者も、全体的に見ると、過去に受けた英語教育の成果にもとづいて、リーディングとライティングを得意としていると考えられる。

なお、今回の質問では「得意である」と判断すべき規準を設けなかったので、参加者が主観的に判断して回答していると思われる。しかし、第一章の「表 2. TOEFL スキル別スコア比較表」を参照することによって、TOEFL スコアとの相関関係を看取することができる。つまり、出発前のスコアについては、18 人の参加者について、一番点数が高いスキルがリーディングだった学生が 14 人、ライティングだった学生が 2 人、リスニングだった学生が 1 人、ライティングとリスニングの両方だった学生が 1 人となっている。帰国後のスコアについては、一番点数が高いスキルがリーディングだった学生が 10 人、ライティングだった学生が 6 人、スピーキングだった学生が 1 人、リーディングとライティングの両方だった学生が 1 人となっている。だから、質問 1 に対する回答の内訳と TOEFL のスキル別のスコアの内訳にはおおよその一致が見られる。したがって、客観的に見ても、最も多くの参加者が得意なスキルはリーディングであり、それにライティングが続くと言うことができる。

(質問 2) 今後とくに伸ばしたい技能を選んでください。

次に、将来とくに伸ばしたい技能を聞いた。これに対しては、スピーキングと答えた学生が 13 人で大部分を占め、3 人がリスニングと答えた。参加者の誰もが将来的にしっかりと身につけたいと考える技能は、英語でのコミュニケーション能力だと言えそうである。

1.2. 普段の英語学習について

(質問 3) 大学入学後の英語力および英語の学習方法についてお尋ねします。
大学入学後の普段から意識して英語の学習に取り組んでいますか？

ここでは、大学入学後の英語学習の状況について聞いた。まずは普段から意識して英語学習に取り組んでいるかどうかを調査し、これに対して取り組んでいると答えた学生は 11 人であり、取り組んでいないと答えた学生は 5 人だった。

(質問 4) 質問 3 で「はい」を選んだ方にお尋ねします。どのようにして英語の学習に取り組んでいますか？該当するもの全てに○をつけて、週何時間くらい使っているかをお答えください。

続いて、普段から意識して英語学習に取り組んでいると答えた学生 11 人に、どのようなことを行っているのか、そしてそのために毎週何時間くらい費やしているのかを質問した。複数の学習方法を採用している学生が 6 人いて、その全員が別の学習方法と併せて独学をしていると答えている。独学だけをしているという学生は 1 人だけだった。独学以外では、大学で積極的に英語の授業に参加しているという学生が 6 人と最も多かった。研究のために英語を使っているという学生は 3 人であり、英会話学校あるいはオンラインの英会話コースで勉強していると回答した学生は 1 人だけだった。その他に、英語を使う課外活動として「外国人向けのボランティアガイドあるいは外国人向けゲストハウスの受付」や「海外インターンシップで来日した留学生のサポート」を行っていると答えた学生がいた。なお、学習時間については、トータルで週に 9.5 時間以上英語学習していると答えた学生が 6 人いるのに対し、5 時間以下の学生が 4 人だった。

今回 NICE プログラムの参加者のうちで普段から意識して英語学習に取り組んでいる学生は、ひとりで英語を勉強するのではなく、授業や課外活動などで他の学生

と一緒に勉強している場合が多い(11人中8人)。ただし、授業については、他の学生と一緒に勉強しているからと言って、英語でのコミュニケーション能力を訓練する機会があるとはかぎらない。今回のアンケートでは大学の英語の授業の内容にまでは踏み込んで質問しなかったが、NICE プログラムの経験にもとづいて日本の英語教育に取り入れたほうがよいと思われるものがあるかどうかを尋ねる質問 (§2. 質問 8) で、プレゼンテーションやディスカッションを挙げた学生が多いことを考え合わせると、大学の英語の授業ではコミュニケーションスキルを学ぶ機会があまりない可能性が高い。だから、課外活動や英会話学校で勉強していると答えた少数の学生を除いては、日常的にスピーキングの訓練を積む機会はあまりないと言えるかもしれない。

(質問 5) 質問 4 で独学で学習しているに○をつけた方にお尋ねします。何か意識して行っている学習法がありましたら教えてください。また、どのような教材を使っていますか？

次に、独学をしていると答えた7人の学生にどのようなメニューをこなしているのかを学習方法と教材に分けて質問した。これに対する答えはばらばらであり、学生が各自で自分に合った学習方法・学習教材を利用していると考えられる。

学習方法としては、リーディングに関しては文章を多読したり音読したりすること、リスニングに関してはオンラインで英語を聞いたり、音楽を聴いたりすること、ライティングに関しては英語で日記をつけることが挙げられている。その他に、英単語を暗記することや、英語の学習方法として有名なシャドーイング(録音されたネイティブ・スピーカーの話し言葉に合わせて復唱すること)やディクテーションに取り組んでいる学生もいた。

教材としては、海外の映画・ドラマや英語のポッドキャスト、YouTube や TED: Ideas Worth Spreading のウェブサイト、NHK のニュースの英語音声などの、生の英語を聞くことができる教材を利用している学生が多かった。この他に、学術論文や TIME を読むと答えた学生がいた。

1.3. 過去の英語試験の受験経験

(質問 6) 今回 NICE 参加のために義務づけられていた TOEFL 受験以前に、英検・TOEIC・TOEFL・IELTS などの英語の試験を受験したことがありますか？

ここでは今回の NICE プログラム参加のために義務づけられていた TOEFL 受験以前に、TOEFL あるいはその他の英語の試験（英検・TOEIC・IELTS）を受験したことがあるかどうかを聞いた。受験したことがあると答えた学生が大部分で 13 人であり、受験したことがないと答えた学生は 3 人に留まった。

（質問 7）質問 6 で「はい」を選んだ方にお尋ねします。差し支えなければ、受験した試験の種類と受験した年、その点数を教えてください。

過去に英語の試験を受験したことがあると答えた学生のうち、英検・TOEIC・TOEFL・IELTS を受験した学生はそれぞれ 6 人、8 人、5 人、3 人だった。この他の英語試験を受けたことがある学生はいなかった。複数の英語試験を受験した学生は 6 人で、四種類の英語試験の全てを受験したことがある学生が 1 人、三種類の英語試験を受けた学生が 1 人いた。また英検を受験したのは比較的過去にさかのぼる学生が多く、2006-2009 年に受験した学生が大半を占めるのに対し、TOEIC・TOEFL・IELTS については、受験した年が判明しているかぎりでは、全て 2010-2012 年に集中している。

2010-2012 年に英語試験を受験した学生は比較的高得点をとっている。例えば、TOEFL を受験した 5 人の学生の点数は 71-90 点であり、今回のプログラム参加者の平均点である 60.8 点よりもずっと高い。また、これらの TOEFL 受験者は全員、質問 3 で普段から意識して英語の勉強をしていると答えており、普段から英語の勉強に取り組む成果が出ていると言えそうである。また 5 人のうち 3 人が長期または短期留学経験者である。

1.4. 過去の留学経験

（質問 8）NICE プログラムに参加する以前に留学（短期語学留学を含む）をしたことがありますか？

NICE プログラム参加者の過去の留学経験について聞いた。留学経験があった学生は 7 人で、約半数だった。

（質問 9）質問 8 で「はい」を選んだ方にお尋ねします。どの国にどのくらいの期間留学していたか教えてください。

続いて、留学経験がある学生にどの国に滞在し、そしてその国にどのくらい滞在していたのかを質問した。イギリスに一年間の長期滞在をしていたひとりを除いて、全員が2週間から2ヶ月の短期留学だった。行き先ではイギリスが最も多く3人であり、他にオーストラリア、フィリピンに留学した学生がいた。(中国へ留学したと回答した学生がひとりいたが、英語学習とは関係ないので、分析の対象とはしない。)

イギリスに二週間滞在した学生のひとりを除いて、留学経験者はいずれも今回のプログラム以前に TOEFL と IELTS のどちらか一方もしくは両方を受験しており、点数は TOEFL については 78 点、81 点、82 点、IELTS については 3 人が 6.5 点と、いずれも比較的高得点である。

1.5. 英語を学ぶ目的

(質問 10) 英語を勉強する目的について教えてください。

このセクションの最後に、英語を勉強する目的について聞いた。回答は複数選択が可能である。一番多かったのは「国際的な場面で活躍したいから」と「視野を広げるため」という目的であり、どちらも 11 人が選択した。次に多かったのは「長期的に留学したいから」と「就職するときに有利になるから」という目的であり、どちらも 6 人が選択した。それに次ぐのは「研究するために英語を使うことが必要」という目的で、5 人が選択した。趣味として英語を勉強していると答えた学生は 1 人であり、この他に「将来英語教師になりたいから」という具体的な目的を挙げた学生が 1 人いた。

選択肢に挙げたもののうちで (a)「就職するときに有利になるから」と「研究するために英語を使うことが必要」は、英語に習熟することよりもむしろ眼前にあるキャリアのステップアップを目的にするという意味で、英語学習の目的としては即物的・道具的なものであると言える。これらと比較すると、(b)「国際的な場面で活躍したいから」と「視野を広げるため」という目的は、より長期的視野に立ち、自己の成長に結びつくようなものである。参加者のうちで(a)のどちらかを選択した学生は 11 人だったのに対し、(b)のどちらかを選択した学生は 14 人だった。だから、今回の NICE プログラムの参加者は、どちらかと言えば (a) の即物的な目的よりもむしろ、(b) の自己成長を目的として英語学習に取り組んでいると言えるだろう。

NICE プログラムアンケート分析(2,3)

2. NICE プログラムの授業

ここでは NICE プログラムの授業について感想を聞いた。質問は大きく四つの部分に分かれる。(1) 質問 1-3 では、授業の内容・雰囲気について尋ねるとともに、教室の設備に問題がなかったか訊いた。(2) 質問 4-6 では各学生が授業に積極的に参加できたかどうかとその理由について尋ねた。(3) 質問 7-8 は NICE プログラムの授業と日本でこれまで受けた授業を比較してもらい、そこから何か将来への示唆が引き出せないか試みた。(4) 最後に質問 9-10 では、NICE プログラムのもう一つの特色であるカルチャーワークショップについて、参加者の経験と感想を教えてもらった。

2.1. 授業の内容・雰囲気などについて

(質問 1) 授業はどういった内容でしたか。授業でやった活動を一つあげて説明して下さい。

最初の質問では、プログラムの授業の内容について全般的に聞いた。学生からの回答によると、クラスのレベルによって授業内容が異なっていた(注: 今回の参加者ははじめのプレイスメントテストによって主に三つのクラス (Intermediate, High Intermediate, Advanced) に分けられた。ただし学生によっては High Intermediate と Advanced の中間のクラスに配分されたものもいた)。

Intermediate クラスでは、クラス参加学生の出身国(日本・韓国)と米国・ハワイの文化について学習した。学習方法としては、学校が提供した文章を読んだり、学生に個々の文化について調べさせて、その内容について簡単なプレゼンテーションをさせるといったものがとられた。High Intermediate クラスでは、上で述べた活動に加えて、学生のペアに「ooについてどう思うか」といった質問が書いてあるカードを与えて互いに質問させるといった活動があった。最後に Advanced クラスでは、プレゼンテーションに加えて、同性婚・体罰といった社会問題などについてのディベートが行われた。

このようにクラスのレベルに応じて活動内容は異なっていたが、全体に共通するのはコミュニケーションの場に英語使用をおいて、そこで実際の使用を通じて学ばせるという方針である。こうした活動を通じて学生は「コミュニケーションのツールとしての英語」という考え方を、明示的に講義などで教えられなくても、知らず知らずのうちに身につけていくと考えられる。

(質問 2) クラスの雰囲気はどうでしたか。

また参加したクラスの雰囲気についても尋ねた。学生の大多数はクラスの雰囲気を良好なものと感じていた。先生もコミュニケーションを促進するようなクラスの雰囲気作りに尽力していたと感じている。

- 仲良く明るい雰囲気。日本人が多く、授業中でも日本語を使う人が多かったのが残念。
- クラス全員がよく話し、先生も優しく、とても雰囲気はよかった。そのため毎日授業に行くのが楽しみでした。

ただ上の感想に見られるように、授業中や休み時間に母国語を使ってしまう学生が（日本人に限らず）ある程度いた様子である。

（質問3）視聴覚設備など、教室の設備は十分でしたか。

ここでは教室の設備について聞いた。大多数（13人）の学生は設備に不備はなかったと答えた。少数の学生（3人）がそれぞれネットの環境、ホワイトボードの不足、空調（学校一括の空調だったので、教室ごとの調節ができなかった）について不十分だったと答えた。

2.2. クラスで発言できたか

質問4-6では、学生に受講したクラスで授業に積極的に貢献できたか、また貢献できた・できなかったその理由について尋ねた。

（質問4）あなたはクラスの中で積極的に発言することができましたか。

学生に、受講したクラスで積極的に発言できたかどうか、「1. かなりできた」から「5. 全然できなかった」まで五つの選択肢から選んでもらった。結果は、肯定的に答えた学生（「1.かなりできた」「2.まあまあできた」）が併せて10人、「4.あまりできなかった」と否定的に答えた学生が5人、「3.どちらともいえない」という学生が1人となった。ただし「発言できなかった」と答えた者のうち4名がAdvancedクラスに参加した者で、このクラスに発言できなかった者が偏っている。この点については質問6の分析にともう一度触れる。

(質問5) 質問4で「1. かなりできた」「2. まあまあできた」と答えた方にお伺いします。あなたが授業の中でよく発言できた理由は何だと思いますか。

この質問と次の質問(質問6)では、上の質問4の答えの理由について訊いた。まずこの質問では「積極的に発言できた」と答えた学生について、どうしてそれができたか理由を尋ねた。

「発言できた」と答えた者の理由として目立ったのは、参加しようと決意を決めていたからと回答した者が何人かいたことである。

- 積極的に参加するという意思があったため。
- 積極的に活動しようと決めていたため。

また授業の中で学生に発言を促す工夫があった(たとえば教師が発言をするように求める)ことをあげる参加者も多かった。

- 先生が積極的にいろんな生徒の意見を聞こうとしたため。みんなが積極的に発言しようとする雰囲気が合ったため。
- 先生が発言をするとにかくほめるので、発言しやすかった。誰も発言しないと授業が進まないのでは、前向きに発言した。

(質問6) 質問4で「4. あまりできなかった」「5. 全然できなかった」と答えた方にお伺いします。あなたが授業の中であまり発言できなかった理由は何だと思いますか。

逆に「発言できなかった」という学生に理由を聞くと、クラスでの会話のペースが速かったことをあげる者が多かった。

- ところどころ英語がうまく聞き取れず、何について話し合っているのかわからないときがあった。自分の話したいことが英語でうまく表現できなかったから。

上で指摘した **Advanced** クラス参加者に「発言できなかった」と答えた学生が多かった事実を併せて考えると、**Advanced** クラスでは参加者のレベルに比べて会話のペースが速かったのではないかと推察される。

次回以降こうしたことを防ぐためには、たとえばハワイ大学に京都大学から要請して Advanced クラスへの参加のハードルを高くして、真にリスニング・スピーキングのレベルの高い学生のみを Advanced クラスへの参加を認めるという方策が考えられる。ただし、一方で「授業で発言できなかった」ということが直ちに NICE プログラムへの不満につながっている訳ではない。たとえば、「授業で発言できなかった」者の間でも NICE プログラムへの満足度はかなり高い（全員が IV の質問 2 で「このプログラムをぜひ勧めたい」あるいは「勧めたい」と回答）。したがって、単純に Advanced クラス参加へのハードルを高くするかどうかは次回以降の検討課題になると思われる。

2.3. NICE プログラムの授業と日本の英語教育との比較

（質問 7）あなたが受けた授業の中で、日本で受けた授業と特に異なる点は何かありましたか。

この質問と次の質問では、このプログラムで受けた授業と日本での英語授業との比較、およびそれに基づく日本の授業への提言がないかどうか尋ねた。これは日本とは異なる授業形態をもつ米国の授業を受けた学生への感想を聞くことによって、将来の日本の英語教育に取り込めるものがないか探るという目的を持っていた。

このプログラムの授業に日本で受けた授業には見られない特徴があったか尋ねた質問 7 に対しては、授業の中で発言を求められる点を上げた回答が多かった。

- 積極的に発言をもとめられるところ。あまり発言をしていなくても先生が"what do you think?"と意見を求めてくるので、うまく授業に入ることができた。

同様の点として、もっと一般的に学生の参加が求められる点を上げたものもあった。

- 生徒同士の discussion とその結果の presentation という流れで授業が進んでいく場面が多かったように思います。（日本では「先生の話聞く」という場面がもっと多いように感じました）
- フィールドワークのように、課外授業があったこと。町の人へのインタビューや、博物館、BBQ などを行った。

さらに、教師が学生をほめてモチベーションを上げる点を上げた学生もいた。

- 先生が生徒をよくほめる。
- 先生がとにかく生徒をほめた。宿題にインタビューがあった。グループ分けでは先生がメンバーを決める。

（質問 8）あなたが受けた授業の中で、これからの日本の教育に取り入れるとよいと思うものは何かありましたか。

上の質問を受けて、では今回のプログラムで受けた授業の中で日本の教育に取り入れた方がよいと思われるものは何かないか尋ねた。答えた者のうち 3 人が「特に何もない」と答えたが、10 人以上の学生が取り入れるべき特徴を挙げた。

- 他の生徒とのディスカッションやプレゼンテーションが多い点。意見を言うと、授業に先生が積極的に反映してくれる点。
- 意見を求めて発言させる教育。今回の授業の大部分は意見の発言・交換でした。

これらの意見に見られるように、多くの参加者は、ディスカッションやプレゼンテーションといった英語を自己表現の道具として使う場を授業が与えていたことに感銘を受けていた。

2.4. カルチャーワークショップについて

NICE プログラムでは、上で述べたような狭義の英語の授業だけでなく、ハワイの文化を現地の人から学ぶ場として「カルチャーワークショップ」を設け、学生に受講してもらった。質問 9 と 10 は、このカルチャーワークショップについて尋ねた。

（質問 9）カルチャーワークショップではどんな活動をしましたか。

質問 9 では、ワークショップの内容について訊いた（複数回答可）。ほとんどの学生がハワイの伝統芸能であるフラダンスの講座をあげた（14 人）。ほかには Farmers' Market 訪問、Bishop Museum 訪問、バレンタインイベント（各 1 人）をあげた学生がいた。

（質問 10）カルチャーワークショップのような現地の文化に触れる活動は、あなたの英語の力を伸ばす上で役に立ちましたか。その理由も答えて下さい。

次にこうしたカルチャーワークショップが自身の英語力向上に役に立ったか質問した。結果は、「役に立った」とするもの（「大いに役に立った」「多少は役に立った」を合わせて）が7人、「あまり役に立たなかった」が2人、「どちらともいえない」が7人だった。

併せて理由を尋ねたところ、「役だった」と答えた参加者は、ワークショップが学校外の人（ネイティブが多い）と話す機会を作ってくれた点、また話題や文化の知識を広げることができた点を上げた。また「どちらともいえない」「役立たなかった」と答えた参加者はともにワークショップ自体は英語の学習とはあまり関係なかったことをあげた。

3. ホームステイについて

NICE プログラムの参加者はハワイ滞在中ホームステイをした（原則として二人一組になって一つの家滞在中）が、ここではホストファミリーからの待遇などについて質問をした。ここでの質問は大きく三つに分けられる。(1) 質問 1-3 ではホストファミリーとのコミュニケーションについて尋ねた。(2) 質問 4-6 では、ステイ先のほかのルームメイト（京大生以外の一時的滞在中者も含む）について訊いた。(3) 最後に質問 7 ではホストファミリーからの待遇について全般的な感想を書いてもらった。

3.1. ホストファミリーとのコミュニケーション

（質問 1）ホームステイ先で、家の人とはどの程度コミュニケーションを取ることができましたか？

まず学生にホストファミリーとどの程度コミュニケーションがとれたか四つの選択肢——「1. 話で大いに盛り上がった」「2. ある程度コミュニケーションが取れた」「3. 必要なコミュニケーションを取ることができた」「4. あまり会話が成立しなかった」——を提示して聞いたところ、全員が 1-3 を選択し、最低限必要なコミュニケーションはとれたと回答した。さらに 16 人中 13 人が「1. 話で大いに盛り上がった」あるいは「2. ある程度コミュニケーションがとれた」と回答し、ホストファミリーとのコミュニケーションには大きな支障がなかったことが示された。

（質問 2）質問 1 で 1-3 を選んだ方にお伺いします。特にどのような話題について話しましたか？

次にホストファミリーとの会話の際、どういった事柄が話題になったか尋ねた（6つの選択肢から選択。複数回答可）。これは会話の頻出トピックを探ることで、事前にそれについての会話のリソース（語彙やフレーズなど）を増やす訓練を行う可能性を探るためであった。結果として最も多かった会話のトピックは「ホストファミリーの家族や経歴について」で11人、つぎに「ハワイやアメリカの文化について」が10人。それに続いて「自分の家族や経歴について」が5人、「英語や日本語について」「趣味について」が各4人となった。また「自分の専門について」が1人となった。こうしてみると、ホストファミリーのことやそれが属する文化について参加者は興味を持って尋ねていたことが窺える。また自分の専門についての会話が少なかったという点で、大学や学会での会話とはある程度文脈が異なっていたことが考えられる。

次にこうしたコミュニケーションを取るに当たってホストファミリーが何か工夫をしていたかどうか、次の質問で尋ねた。

（質問3）ホームステイ先の家の人は何かコミュニケーションが取れるように工夫してくれましたか？ もし何か工夫をしてくれたのであれば、具体的にお答えください。

大多数のホストファミリーは、学生が会話に参加できるよう何らかの工夫をしていた（工夫してくれた：13人、工夫がなかった：3人）。工夫の具体例としては、学生に家族の方から話しかけるようにしたり（話すときでもゆっくり話しかける）、家族によっては学生を名所に連れ出して行くと行っていたことをしていた。ただ「工夫がなかった」と答えた者のうち一人は「工夫はなかったが、ごく自然に会話に入らせてくれた」と工夫がなかったことを肯定的にとらえている。

3.2. ルームメイト（京大生以外の一時的滞在者含む）について

本プログラムでは、大多数の参加者はもう一人の参加者（ともに京大生）と同じところでホームステイすることになっていた。しかしホストファミリーによっては今プログラム以外からゲストをとっていたところもあった。そうしたルームメイト・ゲストについて質問4-6では尋ねた。

（質問4）ホームステイ先に京大生以外の一時的滞在者はいましたか？ もしいましたら、ルームメイトの国籍を教えてください。

まず質問4では、ステイ先に京大生以外の一時滞在者がいたか尋ねた。すると京大生以外の一時滞在者がいたと答えた学生は8人、いないと答えた学生は8人となった。一時滞在者がいたと答えた場合、滞在者の国籍は日本が6人、中国が2人、韓国が1人だった。従って、ルームメイトは全員東アジア出身者であったといえる。これはハワイがアジアに近いという地理を考えると理解できる。

(質問5) ホームステイ先では(一人の方を除いて)もうひとりの京大生と一緒に家に滞在したそうですが、ホームステイ先で日本語は頻繁に使いましたか?

質問4に見られるようにホームステイ先ではほとんどの参加者は別の京大生の参加者と同じ家に滞在したが、この質問では参加者同士が主にどの言葉でコミュニケーションをとっていたかを聞いた。それによるとほとんどの参加者(10人)は「日本語をしゃべっていることの方がかなり多かった」と答えた。3人が日本語と英語を半々でしゃべり、英語の方が多かったという回答は2人だった。

(質問6) 英語を学ぶという観点では、ルームメイトがいたことをどう思いますか?できたら、その理由もお答えください。

質問5の回答に見られるようにほとんどの参加者がもう一人の参加者とはかなりの程度日本語でコミュニケーションをとっていたわけであるが、この質問ではルームメイトがいた方がよかったかどうかについて尋ねた。これについては意見が分かれ「ルームメイトがいてよかった」「一人の方がよかった」「どちらでもない」という回答が同数で並び5人だった。

ただ回答の理由付けについては各回答の中でおよそ意見が統一されていた。たとえば、「ルームメイトがいてよかった」という理由としては「一人でいると心細かったらうから」や「相談相手としてよかった」というものが多かった。また「一人の方がよい」という意見としては、日本語を使う時間が多くなってしまうというものが多数を占めていた。したがって、「ルームメイトがいるとトラブルがあったときなどに心強いが、どうしても日本語を話す機会が多くなるので、英語を話すという目的にはそぐわない」というのが参加者の共通した考えのようだ(この二つの側面の両方に言及した学生も多くいた)。ただし一人だがルームメイトの英語会話に刺激を受けたというものもいた。

3.3. ホストファミリーからの待遇

最後にホームステイ先の生活について全般的な感想を尋ねた。

（質問7）そのほか、ホームステイ先の食事や生活全般について、感想を教えてください。

ここでは自由に感想を書く形式だったので数値的なことは述べられない（「資料」欄を参照）が、全体的にホームステイについては肯定的な感想が多く、学生もホストファミリーについておおむね満足していたことがうかがわれる。以下主だった感想を紹介する。

- ホストマザーが食事や生活備品のことを非常に気にかけてくれて、三週間とても快適でした。ハワイの文化についても教えてくれました。わたしのホストファミリーに会えてよかったと心から思います。
- 本当に恵まれた環境でした。感謝しています。

ただ、複数の学生はファミリーと学校の距離が遠く、通学に時間がかかったことを指摘していた。

- ホームステイ先の食事は、量が多く野菜が少なかったが、おいしかった。生活上、困ったことはあまりなかったが、バスが時間通りに来ないため、バス停で長時間待つことがあり、学校と住居が遠いと不便。

ただ、ステイ先への主な不安はこれくらいであったので、個々のステイ先との相性を除けば、参加者の中でホストファミリーへの不満は限られたものだったと感じられた。

4. 派遣プログラム全体の評価

アンケートの最後のセクションでは、NICEプログラムの総合的な評価を質問した。質問は全部で5つからなり、大きく次の三つのグループに分けられる。(1) 質問1では今回のプログラムで一番印象に残ったことを尋ねた。(2) 質問2-4では、来年度以降のNICEプログラムについて参加者や運営に対するアドバイスや意見を尋ねた。京都大学の他の学生にこのプログラムを勧めるかどうか、このプログラムに参加を

希望する学生にどのようなアドバイスをするか、そしてプログラムで改善を希望する事柄について聞いた。(3)最後の質問5では参加者自身が今回のプログラムとTOEFLとの関連性についてどう考えるかを尋ねた。

4.1. プログラムで一番印象に残ったこと

(質問1) このプログラムに参加して、一番印象に残ったことは何ですか。

ここではプログラム全体を振り返ってみて、一番印象に残ったことは何であるか質問した。「Hawaiiで体験した全て」あるいは「さまざまな文化体験と英語学習」という包括的な回答もあったが、大部分の参加者がもう少し具体的な記述をしており、これらは大きく(1)文化体験、(2)英語学習、(3)生活体験の三つに分けられる。この三つのグループのうちで一番多くの学生(8人)が印象に残ったと答えたのは、文化体験についてである。この場合でもハワイの文化体験全般を包括的に捉える学生が多いが、個別的なものには例えば次のようなものがあった。

- 最も印象に残ったことの一つは、博物館の展示で、「移民」というものがあった。そこで、日本人は当時低賃金の労働力だったこと。WWII〔引用者注：第二次大戦〕を通じて地位が向上し、議員になるものもいたことを知った。初耳だったので驚いた。
- 真珠湾に行って、米国側の視点から第二次世界大戦の歴史に触れたこと。

次に多くの学生(5人)が印象に残ったと答えたのは、英語学習についてである。英語でコミュニケーションをとることが難しかったという意見や一緒に学ぶ学生から刺激を受けたという回答が目立つ。最後に、1人の学生がハワイでのホームステイが一番印象に残ったと答えている。

- ホームステイを心から楽しめたこと。ホームステイは二回目だったが、今回は本当に家族のように接してくださり、家族のイベント(子供の発表会や誕生日会など)にも参加させてもらうことができた。今でもメールでの交流が続いている。

参加者を全体としてみると、英語学習よりもむしろ文化体験のほうに興味を持った学生が多い。このことは、TOEFLの点数だけでは計れないさまざまな経験が、この

プログラムによって得られること、そして参加者にとってはそのような経験のほう
が重要だったということを示しているだろう。

なお、ハワイの文化に触れるためのカルチャーワークショップが英語力向上に役
に立ったかどうかを聞く質問 (§2.4. 質問 9-10) では、比較的多くの参加者 (16 人中 9
人) が「あまり役に立たなかった」あるいは「どちらともいえない」と答えていた。
ここから、このような文化に触れる活動は、必ずしも英語力の向上には役立たない
が、参加者の印象に残るものだったとすることができるだろう。

4. 2. 来年度以降の参加者および運営へのアドバイスと意見

(質問2) あなたはこのプログラムに参加するよう他の京大生にも勧めたいと
思いますか？

最初に、京都大学の他の学生にもこのプログラムに参加するように勧めたいかどう
かを聞いた。これに対してはほぼ全ての参加者 (15 人) が勧めたいと答えた。「是非
勧めたいと思う」と答えた学生が 8 人、「勧めたいと思う」と答えた学生が 7 人で
ある。その他に「あまり勧めたいとは思わない」と答えた学生が 1 人いた。ほぼ全
員がこのプログラムを人に勧めるのに値する善いものであると考えていることが分
かる。

(質問3) 将来同じプログラムをとる人に何かアドバイスがありましたら、
伝えて下さい。

続いて、これから NICE プログラムに参加しようとする人に、体験者としてどのよ
うなアドバイスをするか質問した。回答のなかでは参加するときの心構えについて
のアドバイスが目立つ。例えば次のようなものがある。

- 自分で積極的に英語を使う機会をつくりましょう。
- 目的意識を持ってプログラムに参加すること。やはりハワイなので、いろい
ろな楽しいことがあると思う。そこそこで、達成目標を持ちながら生活すること
で英語力も伸びると考える。

また、事前の英語学習や現地調査をしっかり行うように勧めるものも目立った。その他では、次のような、文化体験や観光がプログラムの重要な部分となることを強調するものがあった。

- 視野を広めるという点では素晴らしいプログラムだと思う。ハワイの人は本当にフレンドリーだから多くの人と至る所で交流できる。ただ、期間や、大学で勉強できる時間が限られているので、とにかく英語を学びたいという人にはあまりお勧めできないと思う。

その他に特記すべき事項として、次のようなクラス分けに関する具体的なアドバイスがあった。

- NICEプログラムのクラス分けで不満を感じたら、なるべく早く先生に相談すべきです。

(質問4) このプログラムで改善できる箇所は何かありますか。教えてください。

次に、体験者から見て NICE プログラムで改善できる点はどのようなことかを尋ねた。回答の大部分が授業や追加プログラムに関するものだった。まずは授業時間について、3人の学生が授業時間を午前中にした方がよいという意見を述べていた。例えば次のような意見がある。

- 授業時間を朝から昼にして欲しいです。ハワイは店の閉まる時間が早く、バスも夕方にはなくなってしまうので、行動範囲が狭まりました。

次に、3人の参加者から授業内容が「やさしい」あるいは「生ぬるい」などの意見があった。これらの学生は Placement Test で High Intermediate あるいは Advanced のグループに配属されているので、よりレベルの高いグループに加われば解決するという問題ではない。NICE プログラムは挑戦しがいのある授業を求める学生にとっては、相応しくない可能性がある。また4人の参加者からは追加プログラムとなるハワイ大学の教授による京大生向けの特別講義についてコメントがあった。このうち2人は特別講義の回数を増やすことを要望しているが、別の2人は、特別講義に参加することが体力的につらかったのでスケジュール設定に余裕を持たせて欲しいとコメントするなど、スケジュールに問題があると考えている。

授業以外では、プログラム全般に関して、重要な連絡を早めに回して欲しいこと、そして事前に詳しい情報が欲しいという要望があった。

- 「携帯をひとり一つ持つこと」「帰国後すぐにTOEFLを受けること」「アンケートを書くこと」など、直前になってから重要な連絡が入ることが多すぎた。初年度ということもあったと思うが、もう少し早めに分かっている情報は流しただけいたら助かった。プログラムに関して、参加前に、五つのクラスに関するレベル、授業の内容の詳細、あとは参加者の声などをもっと載せているとよいと思う。参加前に、どのような授業なのか全く想像できなかった。参加する・しないを決める判断材料にもなると思うので、何らかのかたちで載せていただきたいです。

また、現地学生との交流の機会を増やして欲しいという要望があった。

4.3. 今回のプログラムと TOEFL との関連性について

(質問 5) このプログラムの経験はTOEFLの勉強に役立ったところがありますか。また、それはなぜですか。

アンケートの最後に、今回のプログラムが TOEFL の勉強に役だったかどうかを尋ねた。大部分の学生 (13 人) が役だったと答え、役立たなかったと考える学生は少数 (3 人) だった。

役だったと答えた学生にその理由を尋ねると、大部分がスピーキングとリスニングのよい練習になったと答えている。類似の回答として、次のようなものもあった。

- 現地学生との交流。なぜかというところ、Speaking, Listeningにおける自分の英語に足りないところが分かったから。例えばListeningにおいて、語彙力と練習不足を感じました。

逆に役立たなかったと答えた学生は、NICE プログラムの内容と TOEFL の試験内容が異なっていることを理由としている。

第三章 結論

ここまで第一章では、本派遣事業の参加者がプログラム参加前後に受けた TOEFL のスコアの推移を分析した。また第二章では参加者のアンケートから、参加前の学習状況やプログラムにおける体験・感想についてまとめた。これを受けて本章では、今回の事業の中で改められる点を指摘し、次回以降同種の事業を企画する際の改善案を提言したい。本章ではまず TOEFL スコアの分析からの提言（第 1 節）、アンケート結果からの提言（第 2 節）を行い、最後にそれらとは独立の観点からの提言を与える（第 3 節）。

3.1. TOEFL スコアの分析と提言

本節では第一章における TOEFL スコアの分析の結果を受けて、次回以降の事業に対する改善案を考える。テストの詳細な分析については第一章を参照されたい。

まずプログラム参加前後の参加者の TOEFL スコアの比較は、プログラムが参加者のスコア向上に効果があったことを強く示唆する。前後の TOEFL の全体スコアの差は 12.3 点（満点は 120 点）と大きく、偶然だけでは生じる確率がきわめて低い、つまり統計的に有意である。もちろん、その差のうちの幾ばくかは、短期間に複数回同じ試験を受けたことによる「試験慣れ」によるものがある可能性がある。しかし、二つの試験の間の平均点の差はそれだけで説明できるとは思えないというのが我々の率直な印象であり、したがって、三週間という比較的短期間の研修によっても、かなりの程度のスコアアップの効果があると結論づけられる。したがって、大学生・大学院生の英語力の向上が我が国の学術的・産業的競争力の維持に必要なだという認識が共有されている現状を考えると、この点のみでも本事業を継続していく価値は十分にある。

また今回の派遣事業では、応募者が参加可能人数を上回ったため、応募者を事前の語学試験の点数によって選別した（序論 表 1 参照）。しかし、点数の上昇は事前の試験の点数が相対的に低い学生においてより顕著に見られる。したがって、点数の上昇をプログラムの目標とするかぎり、選別に当たって事前の語学試験の点数が低いことだけを理由に除外する必要はないことが示唆される。

ただし、英語の運用能力を構成する四つの技能——リーディング、リスニング、ライティング、スピーキング——については、結果は大幅に分かれた。インプットの技能（リーディングとリスニング）については、平均点の差はあまり小さくなく、特にリスニングについては統計的に有意な差にならなかった。ゆえに、こうしたインプットの技能についてプログラムが大きな効果があったとは必ずしもいえない。

これに対してアウトプットの技能、つまりライティングとスピーキングについては、かなり大きく点数が改善し（ライティング：4.3 点、スピーキング：4.2 点＝満点は各 30 点）、統計的に有意な差がついた。したがって、アウトプットの技能については、プログラムは大きな効果があったことが示唆される。

また第一章で提示したライティング技能の向上の原因についての仮説が正しければ、上の点数向上の原因の一つは、たんに「日本語の文が与えられて、それを意味の面から対応する英語の文を作成する」というプロセスだけでなく、「自分の考えをまとめて、それを表す英文を作成する」というプロセスを NICE プログラムで訓練させたことにある。したがって、こうした訓練を施すことによって、日本における教育だけでも TOEFL の点数を現在よりも向上させる可能性がある。具体的な方法としては、英語教育にプレゼンテーションやディベートを大幅に組み込むことが考えられる。

また、参加者の感想に反してリスニングにはスコアの改善が見られなかったことから、リスニング能力の向上には、もっと長期間にわたる訓練が必要であることが示唆される。

3.2. アンケート結果からの提言

つぎに本節では第二章のアンケート結果の分析を受けての将来への提言を行う。アンケートの分析そのものについては第二章を参照されたい。

まず述べておく必要があるのは、参加者は NICE プログラムで行われた授業・ホームステイにはおおむね満足していたことである。たとえば、アンケートの質問「あなたはこのプログラムに参加するよう他の京大生にも勧めたいと思いますか？」（質問 4-2）には、この問に答えたほぼ全員が「はい」と回答している（16 人中 15 人）。また授業についても、回答者の多くが授業の雰囲気は良好なものだったと述べている（質問 2-2）。また、このプログラムへの参加が TOEFL スコア向上に役立ったかという問についても、大多数の参加者が肯定的な回答を寄せている（質問 4-5）。授業が行われた NICE プログラムの施設について不満を述べた参加者も少数いたが、問題はいずれも深刻なものではないように思われ、学習を妨げるものでなかった。

またホームステイ先についても参加者はほとんどが肯定的な感想を持っており(質問 3-7)、参加者の間で大きな不満はなかったと考えてよい。したがって、授業についてもホームステイについても、参加者は全般的には満足しており、次回以降も引き続き NICE プログラムに学生を派遣するならば、こうした事業の骨格について変更を施す必要性は薄い。

(1) 授業やホームステイについて

しかし、授業やホームステイの細部については検討の余地がある。たとえば、アンケートの分析から明らかなように、Advanced クラスを受講した参加者は、授業で発言することがあまりできなかったと感じている(質問 2-4)。これは主にクラスメイトや先生の発言の内容を理解するのが困難だったためである。NICE プログラム側がどのような基準によってクラス分けを行っているかアンケートだけではわからないが、こうしたことが生じないためには、一つの対策として NICE プログラムの側にこうした傾向を伝えて、適切な処置をとってもらうことが考えられる。場合によっては、第二章で示唆したように、Advanced クラスへの参加のハードルをあげて、本当にクラスについて行ける学生のみが参加できるようにすることも検討課題になるだろう——ただし、High Intermediate および Advanced クラスを取った学生の中には、授業が簡単だと感じている者もいるので、これが逆効果になる恐れもある。

またクラスの開講時間について、今回のプログラムでは午後になっていたが、何人かの学生は自由時間などの制約から午前中の開講を求めている(質問 4-4)。これは NICE プログラム側の都合もあるので簡単に解決するかわからないが、今後の検討課題である。

今回のプログラムの一つの特色であるカルチャーワークショップについても、参加者の間で意見が分かれた(質問 2-10)。今回はカルチャーワークショップとして主にハワイのフラを学んだが、カルチャーワークショップが自分の英語力の伸長に役だったかを訊いたところ、「役だった」「役立たなかった」が同数で並んだ。この結果に見られるとおり、現在のカルチャーワークショップは単にフラを学ぶ場になってしまっていたので、これをもっと直接的に英語を学ぶ場にしたいと考えるならば、そのありかたを再考する必要がある。ただ、多数の学生がハワイの文化に関する事柄を滞在時全体で最も印象に残ったこととしてあげていたことを考えると、こうした異文化体験が狭い意味での英語学習を超えて意義深いものとして参加者に映っている可能性がある。さらにこれはこの派遣事業の目的にも関わってくる問題であり、狭い意味での英語力の伸張に重きを持つ場合と、異文化体験などを含めた広い

意味での英語運用能力の向上を目指す場合で、このカルチャーワークショップの意味づけも自ら異なってくる。

さらに今回の京都大学のプログラムのためにハワイ大学が教授による特別講義を開講したが、数人の参加者からコメントがあった(質問 4-4)。ただしコメントはどちらかというと反対の方向からのもの(二人は開講回数の増加を求め、もう二人はスケジュール設定に余裕を持たせることを主張)なので、これも簡単に対処することは難しい。

また、今回はプログラムの参加者の大多数を二人一組にして同じ場所にステイさせ、その結果ルームメイトがいる状況になった。このやり方を今後も続けるべきかについては、アンケートで「ルームメイトがいてよかった」「一人の方がよかった」「どちらでもない」という意見が同数で並んだ(質問 3-5)ところを見ると、検討の余地がある。特にある程度の参加者が「ルームメイトがいない方がよかった」と答えているので、たとえば、事前にルームメイトの有無について参加者の間で希望を取り、希望したもの同士でだけ二人一組になってもらうというやり方を取れるかどうか検討するべきである。

(2) 派遣事業の実施方法について

最後に、NICE プログラムを離れて派遣事業そのものの進め方についても改善すべき点がいくつかある。一つは、参加者に対する重要な連絡が遅れたところがある。これは以下のアンケートの回答に見られる(質問 4-4, 再掲)。

- 「携帯をひとり一つ持つこと」「帰国後すぐに TOEFL を受けること」「アンケートを書くこと」など、直前になってから重要な連絡が入ることが多すぎた。初年度ということもあったと思うが、もう少し早めに分かっている情報は流しただけだったら助かった。

こうしたことは本年度が事業の初年度という点から見るとある程度避けられないが、それだけに次回以降の実施では、教官などの事業の実施者の間で事前に詳しい計画を立てておくことが求められる。

また、英語研修プログラム自体についての詳しい情報を事前に参加者に与えることも有益だったと思われる(同、再掲)。

- プログラムに関して、参加前に、五つのクラスに関するレベル、授業の内容の詳細、あとは参加者の声などをもっと載せているとよいと思う。参加前に、ど

のような授業なのか全く想像できなかった。参加する・しないを決める判断材料にもなると思うので、何らかのかたちで載せていただきたいです。

これも初年度のため、詳しい紹介を与える時間的な余裕がなかったものと思われるが、次回からは改善すべき課題である。

3.3. その他の提言

最後に、TOEFL スコアおよびアンケート結果の分析以外から出てきた提言についてまとめる。特に、研修プログラムの効果の測定をより有効なするためにいくつか改善できる点を指摘する。

一つは、出発前に TOEFL を受験できなかった（しなかった）参加者が数名いたことである。TOEFL スコアの分析の際、こうした参加者はプログラム前後の比較ができないため分析の対象から除外せざるを得なかった。こうした学生の中には TOEFL ではなくて IELTS（英国などの大学・大学院入試で用いられる英語試験）のスコアを提出したものもいたが、TOEFL と IELTS では試験の方法などが異なるために、両者のスコアを直接比較し有意義な結論を導き出すことは困難である。したがって、できるだけプログラム参加前に TOEFL を受験してもらうように参加者に働きかけることが重要になる。

また、帰国後のアンケートの形式についても検討が必要である。一つは、今回はアンケート記入があくまで希望者のみを対象にするものだったため、参加者 23 人中 16 人からしか回答を回収できなかった。したがって、参加者の全体像をアンケートで知る必要があるのであれば、アンケートの記入をプログラム参加の必要条件にすることを検討すべきである。

もう一つは、今回はアンケート調査を無記名で行ったが、これを記名式に変更することも検討すべきである。今回の分析では、アンケート結果と TOEFL の結果を基本的に別々に検討することになった。これはアンケートが無記名式だったため、スコアとアンケートを個別の参加者のレベルで結びつけることができなかったという理由による。もし記名式でアンケートを行っていれば、「プログラム前後でスコアが大きく向上した参加者がどういう態度で授業に参加していたか」といったもっと突っ込んだ分析が可能になったと思われる。もちろんアンケートを記名式にする際には参加者のプライバシーに現在よりも配慮することが求められるが、それに見合った成果もまた期待でき、試みる価値がある。

3.4. おわりに

本章では、第一章・第二章の分析を受けて、次回以降同種の事業を行う上で改善すべきと思われる事柄について報告してきた。本章を終えるに当たって今一度強調しておかなくてはならないのは、参加者の NICE プログラムへの満足度は非常に高く、もし機会があれば友人にこのプログラムへの応募を勧めたいと思っていることである。さらに TOEFL スコアへの影響についても、偶然だけでは説明できないようなスコアの上昇も見られる。したがって、本章で指摘した改善点があったとしても、今回の派遣事業には大きな成果があったといえることができる。

付録 1

アンケート原本

世界展開力プログラム： ハワイ大学NICEプログラム・アンケート

このアンケートは、今回の海外派遣プログラムの効果を測り、将来のプログラムの改善のために作成するプログラムの報告書のために行うものです。このアンケートの回答は、上の目的のためだけに使用し、そのほかの目的には一切使用しません。

京都大学文学研究科 外国語支援プロジェクト

質問 0	性別・学年・Placement Testingの結果に○をつけてください。
・性別 1. 男 2. 女 ・学年 1. 学部生 2. 大学院生 ・Placement Testingの結果 1. Basic 2. High Basic 3. Intermediate 4. High Intermediate 5. Advanced	

このアンケートは次の四つのセクションに分かれています。
 I. 参加前の英語力および学習方法・英語を学習する目的について
 II. NICE プログラム全体の評価
 III. ホームステイ先の評価
 IV. 派遣プログラム全体の評価

I. 参加前の英語力および学習方法・英語を学習する目的について

質問 1	最初に、現在の英語力についてお尋ねします。リーディング・ライティング・リスニング・スピーキングのうち、一番得意な技能と二番目に得意な技能をお答えください。
一番目に得意な技能： 1. リーディング 2. ライティング 3. リスニング 4. スピーキング 二番目に得意な技能： 1. リーディング 2. ライティング 3. リスニング 4. スピーキング	

質問 2	今後とくに伸ばしたい技能を選んでください。
1. リーディング 2. ライティング 3. リスニング 4. スピーキング	

質問 3	大学入学後の英語力および英語の学習方法についてお尋ねします。大学入学後の普段から意識して英語の学習に取り組んでいますか？
はい・いいえ	

質問 10	英語を勉強する目的について教えてください。
1. 研究するために英語を使うことが必要 2. 長期的に留学したいから 3. 就職するときに有利になるから 4. 国際的な場面で活躍したいから 5. 視野を広げるため 6. 趣味として 7. その他（具体的に：	
)	

II. NICE プログラム全体の評価

質問 1 ～ 8 は、NICE プログラムの授業について伺います。

質問 1	授業はどういった内容でしたか。授業でやった活動の一つあげて説明して下さい。

質問 2	クラスの雰囲気はどうでしたか。

質問 3	視聴覚設備など、教室の設備は十分でしたか。
1. 十分だった 2. 不十分だった。→どういうところが不十分でしたか。 (	
)	

質問 4	あなたはクラスの中で積極的に発言することができましたか。
1. かなりできた 2. まあまあできた 3. どちらともいえない 4. あまりできなかった 5. 全然できなかった	

質問 5	質問 4 で「1. かなりできた」「2. まあまあできた」と答えた方にお伺いします。あなたが授業の中でよく発言できた理由は何だと思いますか。

質問 6	質問 4 で「4. あまりできなかった」「5. 全然できなかった」と答えた方にお伺いします。あなたが授業の中であまり発言できなかった理由は何だと思いますか。

質問 7	あなたが受けた授業の中で、日本で受けた授業と特に異なる点は何かありましたか。

質問 8	あなたが受けた授業の中で、これからの日本の教育に取り入れるとよいと思うものは何かありましたか。

質問 9 ～ 10 は、NICEプログラムのカルチャーワークショップについて伺います

質問 9	カルチャーワークショップではどんな活動をしましたか。

質問 10	カルチャーワークショップのような現地の文化に触れる活動は、あなたの英語の力を伸ばす上で役に立ちましたか。その理由も答えて下さい。
1. 大いに役に立った	

2. 多少は役に立った
3. どちらともいえない
4. あまり役に立たなかった
5. 全然役に立たなかった

理由（

）

III. ホームステイ先の評価

質問 1	ホームステイ先で、家の人とはどの程度コミュニケーションを取ることができましたか？
------	--

1. 話で大いに盛り上がった
2. ある程度コミュニケーションが取れた
3. 必要なコミュニケーションを取ることができた
4. あまり会話が成立しなかった

質問 2	質問 1 で 1~3 を選んだ方にお伺いします。とくにどのような話題について話しましたか？
------	---

1. 自分の家族や経歴について
2. 相手の家族や経歴について
3. ハワイやアメリカの文化について
4. 英語や日本語について
5. 自分の専門について
6. 趣味について
7. その他（具体的に：

）

質問 3	ホームステイ先の家の人は何かコミュニケーションが取れるように工夫してくれましたか？もし何か工夫してくれたのであれば、具体的にお答えください。
------	--

1. 工夫してくれた。（具体的に：

）

2. とくに何もしてくれなかった。

質問 4	ホームステイ先に京大生以外の一時滞在者はいましたか？もしいましたら、ルームメイトの国籍を教えてください。
------	--

1. 京大生以外の一時滞在者がいた。（国籍：）
2. いなかった。

質問 5	ホームステイ先では（一人の方を除いて）もうひとりの京大生と一緒に家に滞在したそうですが、ホームステイ先で日本語は頻繁に使いましたか？
------	--

1. ほとんど（あるいは完全に）英語を喋っていた。

- | |
|----------------------------|
| 2. 英語を喋っていることの方がかなり多かった。 |
| 3. 日本語と英語を同じくらい喋った。 |
| 4. 日本語を喋っていることの方がかなり多かった。 |
| 5. ほとんど（あるいは完全に）日本語を喋っていた。 |

質問 6	英語を学ぶという観点では、ルームメイトがいたことをどう思いますか？できたら、その理由もお答えください。
1. ルームメイトがいてよかった。 2. 一人のほうがよかった。 3. どちらともいえない。 （理由：)	

質問 7	その他、ホームステイ先の食事や生活全般について、感想を教えてください。

IV. 派遣プログラム全体の評価

この海外派遣プログラム全体について伺います。

質問 1	このプログラムに参加して、一番印象に残ったことは何ですか。

質問 2	あなたはこのプログラムに参加するよう他の京大生にも勧めたいと思いますか？
1. ぜひ勧めたいと思う。 2. 勧めたいと思う。 3. あまり勧めたいとは思わない。 4. 勧めたくないと思う。	

質問 3	将来同じプログラムをとる人に何かアドバイスがありましたら、伝えて下さい。

質問 4	このプログラムで改善できる場所は何かありますか。教えてください。

--

質問 5	このプログラムの経験はTOEFLの勉強に役立ったところがありますか。また、それはなぜですか。
1. はい 2. 特にない	
理由 ()	

貴重なお時間をいただき、大変ありがとうございました！

付録 2 アンケート集計

I. 参加前の英語力および学習方法・英語を学習する目的について

質問 1	最初に、現在の英語力についてお尋ねします。リーディング・ライティング・リスニング・スピーキングのうち、一番得意な技能と二番目に得意な技能をお答えください。
一番目に得意な技能：	
1. リーディング 2.ライティング 3.リスニング 4.スピーキング	
二番目に得意な技能：	
1. リーディング 2.ライティング 3.リスニング 4.スピーキング	

一番目に得意な技能

- 1. リーディング →13人
- 2. ライティング →1人
- 3. リスニング →2人
- 4. スピーキング →0人

二番目に得意な技能

- 1. リーディング →2人
- 2. ライティング →10人
- 3. リスニング →3人
- 4. スピーキング →1人

質問 2	今後とくに伸ばしたい技能を選んでください。
1. リーディング 2.ライティング 3.リスニング 4.スピーキング	

- 1. リーディング →0人
- 2. ライティング →0人
- 3. リスニング →3人
- 4. スピーキング →13人

質問 3	大学入学後の英語力および英語の学習方法についてお尋ねします。大学入学後の普段から意識して英語の学習に取り組んでいますか？
はい・いいえ	

- はい →11人
- いいえ →5人

質問 4	質問 3 で「はい」を選んだ方にお尋ねします。どのようにして英語の学習に取り組んでいますか？該当するもの全てに○をつけて、週何時間くらい使っているかをお答えください。
1.	積極的に大学で英語の授業に参加している。(週 時間くらい)
2.	研究で英語を使っている(英語の論文を読む、英語の講演を聴くなど) (週 時間くらい)
3.	英会話学校に通っている。あるいはオンラインの英会話コースを利用している。 (週 時間くらい)
4.	英語を使うサークルや課外活動に参加している。(週 時間くらい) 具体的な課外活動の内容を書いてください。
5.	独学で学習している。(週 時間くらい)

1. →6人 (1時間: 1人、3時間: 3人、4.5時間: 1人、10時間: 1人)

2. →3人 (2時間: 1人、5時間: 1人、15時間: 1人)

3. →1人 (3時間)

4. →3人

(一年間の交換留学に参加した、8時間: 外国人向けのボランティアガイド／外国人向けゲストハウスの受付、3時間: 海外インターンシップで来日した留学生のサポート)

5. →7人 (2時間: 2人、3時間: 1人、5時間: 1人、8時間: 1人、10時間: 2人)

* トータルの学習時間

19時間: 1人、16時間: 1人、15時間: 2人、13時間: 1人、9.5時間: 1人、

5時間: 1人、4時間: 1人、3時間: 1人、1時間: 1人

質問 5	質問 4 で独学で学習しているに○をつけた方にお尋ねします。何か意識して行っている学習法がありましたら教えてください。また、どのような教材を使っていますか？
学習方法	
1. シャドーイング	2. ディクテーション
3. 音読	4. 文章を多読
5. まとまった文章を暗記	
6. その他(具体的に:)	
教材	
1. 初学者用にやさしく書き直された洋書	2. 海外の小説(古典・ベストセラーなど)
3. ポッドキャスト	4. 海外の映画・ドラマ
5. 市販の英語テスト対策参考書	6. NHKの語学講座
7. その他(具体的に:)	

学習方法

1. シャドーイング →2人

2. ディクテーション →1人

3. 音読 →2人

4. 文章を多読 →3人

5. まとまった文章を暗記 →1人

6. その他 →4人

(日記を書くこと、単語の暗記、Harry Potterなどの洋書を読む／YouTubeで英語を聴く、リスニング、
映画を見る、音楽を聴く)

教材

1. 初学者用にやさしく書き直された洋書 →0人
2. 海外の小説（古典・ベストセラーなど） →0人
3. ポッドキャスト →2人
4. 海外の映画・ドラマ →2人
5. 市販の英語テスト対策参考書 →1人
6. NHKの語学講座 →0人
7. その他 →6人

(英字新聞の多読 (BBC, ABCなど)、TED: Ideas Worth Spreadingウェブサイトの動画、ハーバード大学のマイケル・サンデル教授の講義（英語）をYouTubeで視聴、学術論文を読む、NHKのニュースを英語音声で聞く、TIMEを読む)

質問 6	今回NICE参加のために義務づけられていたTOEFL受験以前に、英検・TOEIC・TOEFL・IELTSなどの英語の試験を受験したことがありますか？
はい・いいえ	

- はい →13人
 いいえ →3人

質問 7	質問 6 で「はい」を選んだ方にお尋ねします。差し支えなければ、受験した試験の種類と受験した年、その点数を教えてください。
1. 英検 (級)	年 合格・不合格
2. TOEIC	年 (点)
3. TOEFL	年 (点)
4. IELTS	年 (点)
5. その他 ()	年 (点)

1. 英検: →6人
 準一級 2011年合格
 準一級 2006年合格
 準二級 (中学3年生のとき) 合格
 二級 2009年合格
 二級 2009年合格
 二級 2008年合格
 2. TOEIC: →8人
 2012年 885点

大学3年 880点

2012年 865点

2010年 825点

2012年 735点

2011年 695点

2012年 630点

2012年 570点

3. TOEFL: →5人

大学2年 90点

2012年 82点

2012年 81点

2010年 78点

2012年 71点

4. IELTS: →3人

2012年 6.5

2011年 6.5

2011年 6.5

5. その他 →0人

質問 8	NICEプログラムに参加する以前に留学（短期語学留学を含む）をしたことがありますか？
はい・いいえ	

はい →7人

いいえ →8人

質問 9	質問 8 で「はい」を選んだ方にお尋ねします。どの国にどのくらいの期間留学していたか教えてください。
国（ ） 期間（ ）	

中国 2週間

フィリピン 2ヶ月

イギリス 1年

イギリス 2週間

イギリス 2週間

オーストラリア 3週間

質問 10	英語を勉強する目的について教えてください。
1. 研究するために英語を使うことが必要 2. 長期的に留学したいから 3. 就職するときに有利になるから 4. 国際的な場面で活躍したいから 5. 視野を広げるため 6. 趣味として 7. その他（具体的 に：	

1. →5人
2. →6人
3. →6人
4. →11人
5. →11人
6. →1人
7. →1人 (将来英語教師になりたいから)

II. NICE プログラム全体の評価

質問 1 ～ 8 は、NICEプログラムの授業について伺います。

質問 1	授業はどういった内容でしたか。授業でやった活動の一つあげて説明して下さい。

- 自国とアメリカの文化の違いについて（テーブルマナー、会話のマナー、バレンタインなど）。毎回短いsentenceを読み、3人くらいでdiscussionし、教室で発表（3分くらい）
- チャイナタウンやビショップミュージアムなどにクラスで行く課外授業。様々な景色を見て友人と英語で感想を伝え合う場面が多く、また実際に見たためにハワイの歴史や文化をよく理解できた。
- カードに書かれたテーマ（〇〇についてどう考えるかなど）について、ペアで話し合い、その後クラスで共有。ペアは異なる国籍の人同士で組み、異文化理解を促進させるようにと指示があった。
- ことわざについてポスターをつくってプレゼンする。
- 同性婚の是非について議論するディベートを行い、肯定派二名、否定派二名に分かれて意見の主張や反論を行った。
- 少人数グループに分かれてのプレゼンテーション・ディベート
- 一つの議題に対してディスカッションをしたり、小グループに分かれて話し合い、それを発表して全体に共有するというかたちが多かったです。

- 生徒一人一人が、ある質問の書かれたカードをもち、クラスの皆で二人ずつランダムにペアになり、その質問を答え合うゲームをしました。
- ハワイの神話についてグループワークで調べ、それをポスターにまとめて発表する。
- ディベート（3人一組のチームに分かれて、相手チームと英語でディベートした）。テーマ：「公立学校で体罰を禁じるべきかどうか」。
- ハワイ文化の学習。多くの文化的影響を受けているハワイ文化を学習することで日本文化はもとより、当たり前になっていた文化を改めて捉え直すことができた。
- 米国及びハワイにおける会話の始め方、失礼のない話題、夕食時の作法についてなどのコミュニケーションにおけるルールやハワイの文化について韓国・日本と比較しながら学んでいきました。例えば、ハワイの文化については生徒がグループを作りそれぞれがハワイの言語・人種・食...について調べ、具体的なデータ（インタビュー結果、写真など）と共に発表しました。
- **Presentation**（個人・グループ）。Topicは主にハワイの文化で、グループに分かれて調査を行い発表した。
- ゲームなどを通じて、英語を口に出すことの抵抗をなくす。（例えばカードに簡単な質問が書いてあり、それをペアで質問し合って会話をする、など）
- ハワイの観光名所・名跡について、どのような場所なのか、生き方などについて調べ発表する。発表の内容から、後日のフィールドトリップでどこに行くかを皆で相談して決定した。
- **debate**や**presentation**。基本的には会話中心。

質問 2	クラスの雰囲気はどうでしたか。

- 仲良く明るい雰囲気。日本人が多く、授業中でも日本語を使う人が多かったのが残念。
- クラス全員がよく話し、先生も優しく、とても雰囲気はよかった。そのため毎日授業に行くのが楽しみでした。
- 発言・質問しやすいクラスだった。
- よかった。
- 皆打ち解け、和気藹々としていた。
- 京大生が静かで他が賑やかであった。
- とてもよかったと思います。休み時間でも皆英語で話そうと努めていましたし、授業中に日本語が聞こえてくることもなく、楽しみながら授業を受けられました。
- 明るい雰囲気でした。
- 全般によかったとは思いますが、やはり出身国や出身校で固まってしまったなという印象。
- みんな仲がよかった。「授業中は絶対に母国語を使っちゃいけない」というルールがあり、これは日本人の生徒と韓国人の生徒が友好的に関わり合うためには非常によい方法だと思った。
- よかった。

- 先生も友好的で、一人一人に話す機会を作り、生徒も積極的に授業に参加するiiクラスでした。しかし休み時間には日本語や韓国語で会話することもあったことが残念でした。
- 皆同じくらいの英語力で、楽しく会話できた。
- 韓国人と日本人半々で、みんなフレンドリーだった。でもみんな少しシャイでシーンとなることがよくあった。
- 韓国人が6割で、残りは日本人だった。お互いによく英語で話をし、仲良くなることができた。
- 最終的にはあまり合わなかった（人間关系的に）。

質問 3	視聴覚設備など、教室の設備は十分でしたか。
1. 十分だった	
2. 不十分だった。→どういうところが不十分でしたか。 (	)

1.→13人

2.→3人

- ネット環境が不十分だった（大学内のwifiが入りにくい教室だったため、授業中でネットで調べられない場面があった。
- ホワイトボードがないときがあった。
- 空調が一括なので寒いときが多かった。

質問 4	あなたはクラスの中で積極的に発言することができましたか。
1. かなりできた	
2. まあまあできた	
3. どちらともいえない	
4. あまりできなかった	
5. 全然できなかった	

- →4人
- →6人
- →1人
- →5人
- →0人

質問 5	質問 4 で「1. かなりできた」「2. まあまあできた」と答えた方にお伺いします。あなたが授業の中でよく発言できた理由は何だと思えますか。

- 授業中に絶対日本語を話さなかった。先生の話真剣に聞き、答えていた。周りの生徒があまり積極的に発言しなかった。
- 先生やクラスの友人が、わたしの発言を一生懸命に聞こうとしてくれたから。
- クラスの雰囲気がよかった。また他の数人の生徒も発言をしていたため。
- 何にでも答えるようにしていたため。
- 積極的に参加するという意思があったため。
- クラスの雰囲気がよく、レベル別のクラス分けだったから。
- 先生が積極的にいろんな生徒の意見を聞こうとしたため。みんなが積極的に発言しようとする雰囲気が合ったため。
- 積極的に活動しようと決めていたため。
- 先生が振ってくれる（質問形式で話してくれる）ことが多かったので。
- 先生が発言をするととにかくほめるので、発言しやすかった。誰も発言しないと授業が進まないで、前向きに発言した。

質問 6	質問 4 で「4. あまりできなかった」「5. 全然できなかった」と答えた方にお伺いします。あなたが授業の中であまり発言できなかった理由は何だと思えますか。

- 自分に比べ周りの英語力（speaking能力）が高く、話のテンポに着いていけなかった。
- ところどころ英語がうまく聞き取れず、何について話し合っているのかわからないときがあった。自分の話したいことが英語でうまく表現できなかったから。
- 英語に自信が持てなかった。聞き取り能力が低かったせいか、何の話題なのかを捉えきれず、入っていけなかった。
- 韓国人の学生（彼らは英語の会話力も高い）は自己主張の強い人が多く、相手の意見を一方的にこちらが聞かなくてはならない場面が多かったから。
- less confident

質問 7	あなたが受けた授業の中で、日本で受けた授業と特に異なる点は何がありましたか。

- 意見を求められるケースが多かった。課外活動(activity)が多かった。
- 学んだフレーズを用いて3人ずつのグループで寸劇を作り発表した。観光客にインタビューしてアンケートの回答を集める課題があったこと。
- 先生が生徒をよくほめる。
- 発言させる機会が多かった。
- 皆が積極的に発言する点。
- 特になし。

- 積極的に発言をもとめられるところ。あまり発言をしていなくても先生が"what do you think?"と意見を求めてくるので、うまく授業に入ることができた。
- 少人数制
- フィールドワークのように、課外授業があったこと。町の人へのインタビューや、博物館、BBQなどを行った。
- 周りの学生が自分の意見を積極的に発言している点。
- 積極的発言を求める点。
- 生徒同士のdiscussionとその結果のpresentationという流れで授業が進んでいく場面が多かったように思います。（日本では「先生の話聞く」という場面がもっと多いように感じました）
- 会話・発表に重点を置いた授業だった。
- 特にありません。スピーキングが多いくらいです。
- 先生がとにかく生徒をほめた。宿題にインタビューがあった。グループ分けでは先生がメンバーを決める。
- creative/creativity が強調されていた点。

質問 8	あなたが受けた授業の中で、これからの日本の教育に取り入れるとよいと思うものは何かありましたか。
------	---

- 他の生徒とのディスカッションやプレゼンテーションが多い点。意見を言うと、授業に先生が積極的に反映してくれる点。
- 意見を求めて発言させる教育。今回の授業の大部分は意見の発言・交換でした。
- 積極的に発言させる。
- 新聞記事を読んで、その内容について英語で簡単に皆の前で説明するもの。
- 特になし。
- 英語を話す授業をもっと増やすべきと思います。
- ディベート。論を戦わせるという視点で行うと、興味深いものだった。
- 語学の授業で、母国語をしゃべるのを禁じること。
- 特になし。
- 少人数クラスでのdiscussionとpresentation（NICEは13人という少人数クラスでよかったです）。（大人数クラスでのdiscussionとpresentationの授業は私立だった中高で受けたことがあるが、みんなだれてしまいうまく機能していなかったの）
- 先述したこと[会話・発表に重点を置いた授業だった]そのもの。
- ディスカッションやディベート（私のクラスではあまりなかったですが）
- グループは先生が決めること。生徒が決めるとつねに同じメンバーになるので、仲良くなりにくい。
- とくになし。

質問 9 ～ 10 は、NICEプログラムのカルチャーワークショップについて伺います

質問 9	カルチャーワークショップではどんな活動をしましたか。
------	----------------------------

- フラダンスの講座
- フラダンスのワークショップ。
- フラダンスのワークショップ。
- フラ
- フラダンス体験。
- フラダンスの基礎的な知識
- ハワイの伝統舞踊であるフラを踊ったり、ハワイ独特の文化に触れたものがあった。
- フラダンス
- フラダンス
- フラダンスのワークショップ。
- フラダンス、バレンタインイベント。
- **Farmers' market**に行って食品の由来や製法を店の方に尋ねたり、アロハタワーに行ってその近くにある土産物屋や画廊で店の人に説明を受けたりしました。
- 街角でのインタビュー調査。bishop museum訪問。
- フラダンスのことでしょうか？
- フラダンス
- フラ体験

質問 10	カルチャーワークショップのような現地の文化に触れる活動は、あなたの英語の力を伸ばす上で役に立ちましたか。その理由も答えて下さい。
1. 大いに役に立った 2. 多少は役に立った 3. どちらともいえない 4. あまり役に立たなかった 5. 全然役に立たなかった 理由（ ）	

- →3人
- →4人
- →7人
- →2人
- →0人

- 英語じゃないと伝わらないニュアンスもあるから。
- 大変興味を持ち、説明を一生懸命聞こうとした。
- （あまり役立たなかった）説明を聞き、実際に踊っただけで、英語を伸ばす要素が特に見当たらなかった。
- （どちらとも言えない）英語よりハワイ語を学んだ。
- （役だった）文化について教える先生の英語が新鮮だったから。
- （どちらとも言えない）英語と関係がなかったため
- （どちらとも言えない）英語を使う機会がそこまで多くなかったから。
- （どちらとも言えない）英語を自分で使う機会が少なかったため。
- （あまり役立たなかった）ワークショップや遠足、ピクニックのために授業時間が削られ、実質的に英語を勉強できる時間が少なかったから。
- （2, 3 共に丸をつけて）クラスの中を深める結果にはなった。
- （大いに役に立った）現地の人と英語を話すよい機会だったし、クラスの先生の話す留学生向けのわかりやすい英語以外の英語を聞けてよかったです。
- （多少は役だった）ネイティブと話す機会が多かった。
- （どちらとも言えない）フラの基本的な精神を知ることができたが英語力に関係があるかは??
- （多少は役だった）フラダンスでの指示は、言葉より身振り手振りなので、直接英語力を伸ばすことはないが、話題としてはフラダンスの話をできるようになった。
- （多少は役だった）現地の人たちのcultural backgroundを多少は知ることができたから

III. ホームステイ先の評価

質問 1	ホームステイ先で、家の人とはどの程度コミュニケーションを取ることができましたか？
1. 話で大いに盛り上がった 2. ある程度コミュニケーションが取れた 3. 必要なコミュニケーションを取ることができた 4. あまり会話が成立しなかった	

- →6人
- →7人
- →3人
- →0人

質問 2	質問 1で1~3を選んだ方にお伺いします。とくにどのような話題について話しましたか？
1. 自分の家族や経歴について 2. 相手の家族や経歴について 3. ハワイやアメリカの文化について 4. 英語や日本語について 5. 自分の専門について 6. 趣味について 7. その他（具体的に： ）	

- →5人
- →11人
- →10人
- →4人
- →1人
- →4人
- →0人

質問 3	ホームステイ先の家の人は何かコミュニケーションが取れるように工夫してくれましたか？ もし何か工夫してくれたのであれば、具体的にお答えください。
1. 工夫してくれた。（具体的に： ） 2. とくに何もしてくれなかった。	

- →13人
- →3人

工夫の具体例

- 一緒につくったり、出かけようと誘ってくれた。
- 顔を合わせたら話してくれた。買い物に連れて行ってくれた。
- （とくになにもしてくれなかったが）特に易しい英語を使うこともなく、家族の会話の中に自然と入れてくれました。
- 話しかけてくれた。
- 「今日はどうだった？」「何をした？」と聞いてくれた。
- ゆっくりとしゃべってくれた。
- 晩ご飯を一緒に食べました。
- 夕食時、よく話しかけてくれた。話す際はゆっくりはっきりと発音するよう注意してくれていた。
- ハナウマ湾などに来るまで連れて行ってくれた。バーベキューなど家族と一緒に過ごす時間を作ってくれた。
- 夕飯の時にAmericanの父親が隣の積になるようにしてくれた（母親の方はJapaneseだった）。

- 色々と質問してくれた。
- 一緒に出かけたり、あとは毎日食事の際話を振ってくれていた。
- よく話しかけてくれたり、いろいろなところに連れて行ってくれた。
- ゆっくり話してくれた。

質問 4	ホームステイ先に京大生以外の一時滞在者はいましたか？もしありましたら、ルームメイトの国籍を教えてください。
1. 京大生以外の一時滞在者がいた。（国籍： ）	
2. いなかった。	

- →8人
- →8人

一時滞在者がいた場合

- 中国、日本
- 日本
- 日本
- 日本
- 中国
- 日本
- Japanese
- Korean

質問 5	ホームステイ先では（一人の方を除いて）もうひとりの京大生と一緒に家に滞在したそうですが、ホームステイ先で日本語は頻繁に使いましたか？
1. ほとんど（あるいは完全に）英語を喋っていた。	
2. 英語を喋っていることの方がかなり多かった。	
3. 日本語と英語を同じくらい喋った。	
4. 日本語を喋っていることの方がかなり多かった。	
5. ほとんど（あるいは完全に）日本語を喋っていた。	

- 1人
- 1人
- 3人
- 10人
- 0人

- ホストマザーが食事や生活備品のことを非常に気にかけてくれて、三週間とても快適でした。ハワイの文化についても教えてくれました。わたしのホストファミリーに会えてよかったと心から思います。
- わたしのステイ先は大変親切にしてくださいました。休日や放課後は、車であちこち連れて行ってくれたり、ご飯もたいてい皆で食べました。家のルール自体もそこまで厳しくなく（夜中に大きな音を立てないなどの常識的なもの）、ストレスをほとんどためることなく過ごすことができました。ただ、大学からバスで1時間半ほどかかる点は、不便でした。
- 準備してあるものを自分で盛りつけた。不自由なく暮らせて満足です。
- ホームステイを受け入れると言うことは一つのビジネスだと感じた。よくしてくれたと思うが、ドライな関係だった。
- ホームステイ先の方が気を遣ってくださり、楽しめた。
- ホームステイ先の家族がベジタリアンで、毎食ほとんど同じの冷凍食品で正直つまりました。居心地はよかったのですが、こちらから話しかける以外は特に話しかけてくることはなく、干渉してこない感じでした。
- 食事が毎晩同じ時刻に提供されるので、規則正しかったです。
- 家族の方がもともとバランスのよい食事をしていらしく、毎日野菜もとれたし、おいしい料理だった。また、好きなだけ自分で採る方式だったので、気楽に食べる量を調節できてよかった。部屋にトイレと風呂がついていたので、家族に迷惑をしないで済み、よかった。ただベッドが一つしかなく、ルームメイトは床にベットマットを敷いて寝ていたので、ベッドが二つあるとよりよかったと思う。
- わたしのホームステイ先は子供が多く、賑やかな家庭で、お父さん・おかあさんも大変親切だったので、とても恵まれていたと思います。唯一の問題点は、通学時間が非常に長かったことです。
- 食事もおいしく、積極的にホームステイ先が会話をしてくれ、とても楽しく実りあった。
- 食事はJapaneseの母が作ってくれ、少しAmericanizeされた日本食という感じでおいしく毎日いただきました。日本人が多い環境だったということもあり、少し日本語を多用してしまったな、と思います。
- 生活は満足だが、食事に野菜が少ないので体調が崩れたときがあった。
- とてもよくしてもらいました。食事がおいしかったです。
- ホームステイ先の食事は、量が多く野菜が少なかったが、おいしかった。生活上、困ったことはあまりなかったが、バスが時間通りに来ないため、バス停で長時間待つことがあり、学校と住居が遠いと不便。
- 本当に恵まれた環境でした。感謝しています。

IV. 派遣プログラム全体の評価

質問 1	このプログラムに参加して、一番印象に残ったことは何ですか。

(0) 総合的

- Hawaiiで体験した全て
- さまざまな文化体験と英語学習

(1) 文化体験

- 最も印象に残ったことの一つは、博物館の展示で、「移民」というものがあった。そこで、日本人は当時低賃金の労働力だったこと。WWIIを通じて地位が向上し、議員になるものもいたことを知った。初耳だったので驚いた。
- ハワイという場所の多文化性みたいなものと、そこから来る寛容さが日本と違いすぎて印象に残っている。
- 多文化に触れられたこと。
- 真珠湾に行って、米国側の視点から第二次世界大戦の歴史に触れたこと。
- 予想以上にハワイについて学ぶ機会が多かった。
- ハワイの歴史や文化も学び、観光をし、さまざまなアクティビティを経験して、ハワイの食事を食べて、ハワイを大満喫できたこと。
- ハワイの人々の多様性や複雑な歴史を感じた。人々がそれらを乗り越え、笑顔で暮らしていることに感動した。
- 休日にハワイをまわって見た絶景。

(2) 英語学習

- 同じ日本から来た学生の様子。英語に対する積極性の違いを感じ、積極的な様子の人からよい刺激を受けました。
- 何かしら話せば英語は通じるということ。
- 英会話の難しさ。
- 毎日の授業が印象に残っています。自分の言いたいことが英語で出てこない歯がゆさが一番印象に残っています。
- レベルの高い人と友達になれ、彼らと英語を学べたこと。

(3) 生活体験

- ホームステイを心から楽しめたこと。ホームステイは二回目だったが、今回は本当に家族のように接していただき、家族のイベント（子供の発表会や誕生日会など）にも参加させてもらうことができた。今でもメールでの交流が続いている。

質問 2	あなたはこのプログラムに参加するよう他の京大生にも勧めたいと思いますか？
------	--------------------------------------

- | |
|-------------------|
| 1. ぜひ勧めたいと思う。 |
| 2. 勧めたいと思う。 |
| 3. あまり勧めたいとは思わない。 |
| 4. 勧めたくないと思う。 |

1. →8人
2. →7人
3. →1人
4. →0人

質問 3	将来同じプログラムをとる人に何かアドバイスがありましたら、伝えて下さい。

(1) 参加する心構えについて

- 自分で積極的に英語を使う機会をつくりましょう。
- 積極的に英語を話さないと損だと思います。
- 思ったことは早めに言うべきだと思った。特に相手が日本人でない場合、常識が異なるので、対話でなければ解決が難しい。
- 授業など、全ての活動に積極的に参加すべきです。
- 目的意識を持ってプログラムに参加すること。やはりハワイなので、いろいろな楽しいことがあると思う。そこそこで、達成目標を持ちながら生活することで英語力も伸びると考える。
- NICEプログラムのクラス分けで不満を感じたら、なるべく早く先生に相談すべきです。

(2) 事前の準備について

- 事前の英語力がどれだけあるかによって、どの程度コミュニケーションが取れるかが変わってくるので、事前勉強は大切だと思いました。とくにリスニングに関して。
- 英語のしっかりとした予習
- 事前にできる限り英語学習を頑張った方がよい。
- 事前の現地調査をしっかり！

(3) 英語学習以外

- 真珠湾は日本人として絶対に訪れるべき場所だと思います。
- 観光も勉強も、という方にお勧めします。
- 英語だけでなく得るものが大きいと感じます。
- 視野を広めるという点では素晴らしいプログラムだと思う。ハワイの人は本当にフレンドリーだから多くの人と至る所で交流できる。ただ、期間や、大学で勉強できる時間が限られているので、とにかく英語を学びたいという人にはあまりお勧めできないと思う。
- Have a fun!

質問 4	このプログラムで改善できる場所は何かありますか。教えて下さい。

(1) 授業の時間・内容・追加プログラムについて

- 授業の時間を午前してくれたほうが、午後の時間を有効活用できると思う。
- 授業時間を午前中にして欲しい。その方が、バスやステイ先の距離等を考えると便利だと思う。
- 授業時間を朝から昼にして欲しいです。ハワイは店の閉まる時間が早く、バスも夕方にはなくなってしまうので、行動範囲が狭まりました。
- 授業の内容の高度化。

- 授業の難易度が若干やさしかった。（英語を母国語としない）アジア系の学生ばかりと一緒に学んでもなかなか英会話は上達しないので、もっとネイティブスピーカーと喋る機会を増やして欲しいです。
- NICEの授業は観光とかも多くてちょっと生ぬるいので、もっと京大生だけのレクチャーを増やして欲しい。
- ハワイ大学の教授による、京大生向けのSpecial Lecutureがとてもよかったので、もっと回数を増やせるといいと思う。
- 京都大学による追加のプログラムに参加するのは、体力的にしんどかった。減らすか、日時をもう少し考えて欲しい。
- 追加プログラムのスケジュール。

(2) プログラム全般・生活に関すること

- 「携帯をひとり一つ持つこと」「帰国後すぐにTOEFLを受けること」「アンケートを書くこと」など、直前になってから重要な連絡が入ることが多すぎた。初年度ということもあったと思うが、もう少し早めに分かっている情報は流していただけたら助かった。プログラムに関して、参加前に、五つのクラスに関するレベル、授業の内容の詳細、あとは参加者の声などをもっと載せているとよいと思う。参加前に、どのような授業なのか全く想像できなかった。参加する・しないを決める判断材料にもなると思うので、何らかのかたちで載せていただきたいです。
- ホームステイはひとりだったらもっと過酷だと思う。コンソーシアムは強制じゃなくていいと思う。
- ホームステイはホテル滞在でもあまり英語力の変化に影響しないと思う。
- もう少し現地学生との交流機会を増やして欲しいと思いました。

質問 5	このプログラムの経験はTOEFLの勉強に役立ったところがありますか。また、それはなぜですか。
1. はい 2. 特にない 理由 ()	

1. はい →13人

2. 特にない →3人

(1) 「はい」の理由

- スピーキング・リスニングのよい練習になった。
- Speakingの表現の幅が広がった。
- 現地学生との交流。なぜかというところ、Speaking, Listeningにおける自分の英語に足りないところが分かったから。例えばListeningにおいて、語彙力と練習不足を感じました。
- スピーキング。
- 毎日生きた英語に触れることでリスニング力が向上したから。
- 英語を話すことになれ、TOEFLのスピーキングのときに戸惑わなくてすんだから。

- スピーキングセクションの勉強が楽になった。
- Listening能力は向上したと思います。
- Speakingの練習がよくできたから。
- リスニング、スピーキング機会が多かった。
- リスニング力が（一時的であれ）向上したと実感したため。
- 普段よりSpeakingを練習できたから。
- 自信がついた。

(2) 「いいえ」の理由

- NICEプログラムの内容はTOEFLとかけ離れているから。
- 今回学んだのは日常会話で、TOEFLの学術英語とは少し異なると思います。

